



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	反復で読み解くグリム童話入門. 第2章, 西洋人は首狩り族
Author(s)	高橋, 吉文
Citation	メディア・コミュニケーション研究, 56, 1-53
Issue Date	2009-07-31
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/39030
Type	departmental bulletin paper
File Information	56-001.pdf



反復で読み解くグリム童話入門

第2章 西洋人は首狩り族

高 橋 吉 文

要 約

グリム童話は、ある特定の記号（コード）の反復から組み立てられていることが基本であるが、そこにおいてとりわけ際だつもののひとつが、〈切断〉コードの反復である（第1章）。しかし、記号という一見人工的にみえるものの基底には、古代や太古の昔に遡りうる民俗的・神話的な思惟がとぐろを巻いている。その〈切断〉コードとも深く関わる人頭・生首信仰もその一例である。

本論第2章では、人頭崇拝の普遍的広がりの確認を導入として、西洋文化の二大源流地中海とケルト等に顕著な人頭崇拝例と、西洋世界におけるその強靱な呪縛系譜（西洋人＝首狩り族）を示す。その後、口承世界における生首嗜好の世界的広がりをまずは示した上で、頭部に呪力を感じる神話的思考の存在、及び口承物語におけるその展開を継承した民衆昔話のひとつ『子どもと家庭のための昔話集（グリム童話集）』（KHM）において、〈斬首〉コードがどのように反復され、メルヘンを構成しているかを確認する。KHM47「ねずの木」では〈斬首〉コードの反復とシンメトリー構成を簡潔に示し、斬首され門壁に釘で打ち付けられた馬頭が王女と言葉をかわす KHM89「鷺鳥番のむすめ」では、その〈斬首〉コード反復が、古代ゲルマン人の馬頭信仰という歴史的事実や神話的思惟にいかに関わり込められていたかを明らかにする¹。

目 次

- 1 普遍的な人頭崇拝
- 2 西洋文化2つの源流——古代ギリシアとケルト
- 3 中世の聖堂は生首だらけ
- 4 世界の説話に見られる生首
- 5 グリム童話 KHM47「ねずの木」の斬首反復
- 6 KHM89「鷺鳥番のむすめ」と古代ゲルマン人の馬頭信仰
- 7 頭蓋信仰の広がり

1 普遍的な人頭崇拜

今なお根強い人気を博している『子どもと家庭のための昔話集 (=グリム童話集)』(Kinder- und Hausmärchen, KHM と略記される。KHM の分類番号は、ヴィルヘルム・グリムによる1856年の最終決定版第七版の配列に基づく)は、表に見えている要素やモチーフだけではなく、その背後に隠されている見えないコードにも基づいており、私たちは、そのコードの反復というまことに単純素朴なものを手がかりにして、その背後に隠されているもう一つの物語宇宙の奥に秘かに降りていくことができる。「反復で読み解くグリム童話入門 第1章 KHM21「灰かぶり」」(『グリム研究』9号、2001、日本グリム協会、東京、pp.1-20)では、グリム童話 KHM21「灰かぶり (=シンデレラ)」を例にとりあげて、反復されるモチーフや記号(コード)がどのようにしてメルヘンを構築していくかを版の比較に基づいて具体的に解析し、グリム童話を記号的かつ構造的に読んでいく方法の必然性と重要性をデモンストレーションしてみせた。

しかしながら、ここ第2章では少し視点を変えて、グリム童話において反復される記号表現(コード)の前提になっていると考えられる民俗的歴史的資料の領域へと大きく迂回し、記号表現の背後に分厚く沈殿している民俗的な要素の重みと歴史的な奥行きとを覗きみてみようと思う。なぜならば、記号(コード)という一見人工的なものがなぜグリム童話という口承的かつ民衆的な分野でそのように反復されるのか、またメルヘンを読むにおいてはたしてそのような読み方をする必要があるのか、あるいはコードの反復といったかなり現代的ともみえる読解が、そもそもその話を伝承してきた当時の民衆や現代の私たちの物語享受や生活に何か関係がありうるのか、今ひとつしっくりこない、よくわからない、というのが一般の人々の実際かもしれないからである。だが、記号的解析と民俗的要素とは異なるものではなく、記号は、それが用いられる現場では必ずしも恣意的でも人工的でもなく、特に物語においてある特定の記号(コード)が好んで反復される場合、それを必然たらしめる生態的環境や歴史が重い内実としてその記号の背後に深く沈殿し、雌伏している。

例えば、私たち日本人は神社にいけば、まるで自明であるかのように賽銭を投げ、鈴緒なる太綱を振ってはがらんがらんと神鈴を鳴らし、ポンポンと柏手^{かしわで}を打って願い事をする。それは自明のようにみえて、実は少しも自明な行為ではない。その行為には、日本に特殊な神道の独自性がのぞけているというだけではなく、その柏手のうちには、漢民族によって周辺^{周辺}の山岳部等に駆逐された中国の少数民族のそれとよく似た習俗にまで遡りうる謎めく経緯と起源とが、満々と湛えられているからである。私たちの風習のすべてには、そのような歴史的由来や謎が秘かに揺曳している。漢字ひとつひとつのうちに生々しい原始的感性が隠されていて、その内なる生命は今なお静かに隠れて、しかし死に絶えることなく妖しげにとぐろを巻いてうごめいているのと同様に、民俗的原始的感性の持続と秘匿といった現象は、ヨーロッパの文化においても、あるいはグリム兄弟たちが生き、民俗事象(メルヘンや伝説、神話、民謡、風習、

迷信等）や歴史的事象（古代の法制度や言語の変遷等）において明らかにしようと願ったドイツ・ゲルマン世界においても、見出すことができる。西洋社会や世界に広く流布する民話を数多く集めたグリムたちのメルヘンのうちにも、古代において自明であった独自の考え方や感じ方が、幽暗に秘匿されるかにみえながらも、トラウマ（心的外傷）のように今なお深い意味を担っていることがある。さりげないものや表現のうちに、基底的・根源的ともいえる思考の型が暗示され、その反復とともに人の可視領域へと突如噴き上がる。第1章で言及した、あの風に飛ばされころころと地面を転がりゆくクルトくんの帽子等（KHM89「鷺鳥番のむすめ」）に象徴されていた、グリムたちによって意識的に反復されている^{ざん}斬首記号（コード）もまた、そうした不気味に雌伏し、とぐろを巻くさりげないものの一例である。

KHM21「灰かぶり」の切断コードの異常なまでの反復とそこに織り込まれた意味を考察した第1章では、KHM89「鷺鳥番のむすめ」で風に飛ばされるコンラート少年（クルトくん）の山高の帽子や、小枝にはじき飛ばされてしまった灰かぶり（＝シンデレラ）の父親の帽子（KHM21「灰かぶり」）のいずれの場合にも、首斬り処刑が象徴的に暗示されている、と記したが、これは少々性急にすぎるのでは、と読者たちには感じられたかもしれない。帽子がつむじ風に吹き飛ばされたくらいで、これは首斬りを象徴するといわれても、あまりに恣意的にすぎて腑に落ちない。それならば何であってもそのようにいえるのではないか、と考えられるからである。そもそもこの理性的なはずの私たちの現代社会において、首を斬るなどというどう見てもありそうにもない状況をあえて連想する必要があるのか、疑問ではある。古のアフリカやメラネシア等の地にかつて存在していたとされるいわゆる首狩り族ならともかく、理性の老家である西洋世界の生み出した明るいメルヘンの、それも何げない場面まで、野蛮きわまりない首斬り行為を読み取ることにたして意味があるのだろうか。

だが、オウム事件や神戸大震災に続いて起こった少年Aの戦慄的な首斬り事件（1997年）や、現在アメリカ等に頻発し、近年のミステリー小説においても隆盛の猟奇的事件の数々は、生首切断という行為が今なお、ないしは今こそまさにアクチュアル（現実的）であることをはっきりと告げている（大澤真幸『不可能性の時代』岩波新書、2008、「II虚構の時代」pp.57-67参照）。なぜ彼ら犯人たちは生首の切断にこだわったのだろうか。そのこだわりを理解する糸口は、現代のアクチュアルな事件と、はるか古代の歴史や神話的思考との間の照応にある。神話が生きていたはるか古代へと歴史を遡っていく時、私たちは、古代ヨーロッパであれ、古代中国であれ、いずれもが呪術を篤く信奉する筋金いりの首狩り族であったという、驚くべき事実におちあたるからである。

例えば、中国古代史の研究家である白川静の驚異的な辞典『字訓』（平凡社、1987）や『字統』（同、1984）等に結実した古代中国研究は、漢字の原初的形態ともいべき甲骨文字や金文の解読によって、古代中国の世界が生々しい呪術に満ち満ちていた様子を、それこそ迫真的筆致で描き出してみせている。例えば、「道」という私たちにもおなじみの漢字も、異族すなわち敵

の部族の髑髏、すなわちしゃれこうべ（これが「白」という文字の本来の意味である）を棒に刺して高くかざし、軍隊が進んでいく様子を形にしたものであるという。つまり、危険な魔物たちが跳梁する十字路や領域の境に、その「白」を高く掲げて魔を祓い進軍する姿を具体的に描いたものが、「道」という漢字の本来の意味である、というのである。しゃれこうべが掲げられるのは、人間の頭部（首）には呪いによる邪気を祓うに足る強い呪力がそなわっていると考えられていたからである。

それゆえ、都市の城門に異族の首を埋めて都市を護る生々しい呪術もまた行われていた。生首や髑髏を敵に突きつける時、人間の力を超えたその呪力は、自分たちを護ってくれる比類ない力となるからである。「安陽の殷の陵墓に、数百に及ぶ断首の殉教がみられる。首と身とを別に、それぞれ十個ずつ一坑に埋めたものが、数十坑もならぶのである。」（白川静『中国古代の文化』講談社学術文庫、2001、p.218）—— 上述の「道」の意味系列の解説についても、同書215-218頁を、さらには白川静『中国古代の民俗』同文庫、1991、p.73も参照されたい—— という古代の例から、人頭儀礼が比較的近年までなされていたともいわれる中国大陸雲南省や台湾の先住民族の一部にいたるまで、中国文化圏等には人頭崇拜に関する長くて持続的な歴史がある。

呪術満ちる古代中国にことは限らない。他の諸地域においても、生首や髑髏の呪力は頻繁に現れる。岩田慶治著『カミの人類学：不思議の場所をめぐる』（講談社学術文庫、1985）には、東南アジア等に確認されるという、舟に描かれた眼の呪力（pp.177-184）や、私たちにおなじみの鉢巻さも含めヘアバンド、首飾り、帽子が人の頭部に宿る魂の流出を食い止める呪術的機能をもっていることが指摘されている（pp.112-115）。ボルネオのケンヤー族では1930年代頃まで、ロングハウスの長廊下に数多くの頭蓋骨が吊され、村と村人を守護していた事実すなわち人頭崇拜（p.381）があったことが、その書には記されている。「高千穂神楽の古形をなす」と言われる宮崎県高千穂町の猪掛^{ししかけ}祭りの由来を示す伝説では、退治された鬼、鬼八の頭が埋められる。ところが、「そこにある鬼八塚は、別名「霜宮様」とも呼ばれて、土地の人々から寒害を防いでくれる神として崇められているという。」（吉田敦彦『鬼と悪魔の神話学』青土社、2006、p.36）古代中国や雲南省の少数民族、後述するケルトの『マビノギオン』中の英雄ブラーンの生首埋葬伝承や、西洋中世後期13世紀の『狐物語』第二十三枝篇の、地中から掘り出された語る空洞の頭（池上俊一『身体の中世』ちくま文庫、2001、p.124）ともよく似た観念や呪術的信仰を、ここに見てとることができる。血したたる悪魔の首をひっさげるインドのシヴァ神崇拜は有名であるが、そのインド神話の「ヴィシュヌ神は円盤で（悪魔の親玉）ラーフの首を切り落とした。ラーフの頭はそのまま不死となって、日蝕や月蝕を引き起こす悪魔とな」（フランシス・ハックスリー『イメージの博物館13 龍とドラゴン』中野美代子訳、平凡社、1982、p.71）ったとされる。

ニューギニア中南部のマリンド・アニメ族の凄惨な加入儀礼の祭りでは、その「肩に狩り取られた人間の頭を数珠つなぎにした飾りを掛けていっているとされている神霊」ソソムがやってく

る(吉田敦彦『鬼と悪魔の神話学』青土社、2006、p.114)。これは、ドイツの人類学者イェンゼンが報告した「ハイヌヴェレ神話」、すなわち日本の『古事記』におけるオオゲツヒメの殺戮にも繋がる作物起源神話に深く関わる祭儀群のひとつであるが、ニューギニアにおいて伝承されていたその祭儀群において、首狩りは特別の重要性を帯びていた(AD・E・イェンゼン『殺された女神』人類学ゼミナール2、大林太良、牛島巖、樋口大介訳、弘文堂、1981、pp.26-106)。

いわゆる首狩りという習俗は今は消滅してしまったが、例えばボルネオのダヤク族ではかつて首級入手が結婚の条件であり、台湾のアタヤル族でも20世紀初めまで首狩りが成人式の儀礼のひとつとされていた。ルソン島のボントク族、南米エクアドル領のヒパロ族(平凡社『世界大百科事典8』1992、p.150「くびかり」の項、友林啓泰記述)、アフリカ・バントゥー族、西カメルーンの諸族、メラネシア、ミクロネシア、ニューギニア、奥インド、アマゾン低地帯、南アラスカやアリューシャン列島のエスキモー(Der grosse Herder, Band 5, 1954, “Kopfjagd”(首狩り)の項)、北米クワキウトル族(Gertrude Jobs, *Dictionary of mythology, folklore and symbols*, The Scarecrow Press, 1962, p.736 “head-hunting”の項)等、「首狩は世界的にひろく分布していた行事である」(古野清人「首狩」、『古野清人著作集4』三一書房、1972、p.48)。「ヨーロッパでも、東欧のバルカン地方では20世紀初頭まで首狩りが行われていたという。」(『文化人類学事典』、弘文堂、昭和62、pp.225-226、「首狩り」の項、山下普司記)。

こうした首狩り習俗への学術的研究は、民族学研究が隆盛した19世紀末から20世紀前半のフレイザーの比較神話学研究(『金枝篇』1890-1936)等に始まり、その後、その路線上にハイネ＝ゲルデルン、ハットン、フォン・フューラー＝ハイメンドルフ、タルボット、イェンゼン等の民族学者・文化人類学者たちによって強い関心をもって進められていった²。フレイザーは、『金枝篇(二)』(永橋卓介訳、岩波文庫、1978、p.73、p.160、pp.164-178)、『金枝篇(三)』(同、1978、pp.214-215、p.229、pp.235-239)等でたびたび頭や毛髪象徴性、首狩りや斬首に触れている。『金枝篇(四)』第59章「メキシコの神殺し」(同、1978、pp.204-213)の中ではフレイザーは、古代アステカ帝国で崇められていたトウモロコシの女神チコモコワトルのための斬首供儀を、穀物豊饒のための呪的行為として解している(『金枝篇(三)』p.176、p.248も参照)。

この場合もまた、トウモロコシと種を積み上げ、その上でいけにえの女の首をはね、その血をトウモロコシの女神の像ばかりでなく、積み上げたトウモロコシ、胡椒の実、カボチャ、種子、野菜などの上にもふりまいた。この慣習は、穀物の女神そのものの血を穀物に注ぐことで、穀物など大地の恵みの収穫を促し、増やすのを目的としていたようだ。(サー・ジェームズ・ジョージ・フレイザー著、メアリ・ダグラス監修、サビーヌ・マコーマック編『図説 金枝篇』内田昭一郎、吉岡晶子訳、東京書籍株式会社、1994、p.286。Cf.『金枝篇(四)』p.211)

そのトゥモロコシを下界の王女シュキクが生成させる顛末を語るマヤ族の神話伝承「冥府からの挑戦」では、冥界に侵入した神の子フンフン・アブが斬首され、その生首が木に吊される。

冥府の支配者たちは、手下のものにいいつけて、フンフン・アブの頭を切りとって、たくさんのひょうたんのなっている一本の樹に吊させた。([冥府からの挑戦]、松村武雄編訳『マヤ・インカ神話伝説集』現代教養文庫1098、社会思想社、1987、p.92)

そして、死界の貴人の娘シュキクが、そのひょうたんの果実をちぎろうとするや、フンフン・アブの頭（生首）はその乙女に唾を吐きかけて、シュキクは母になるだろうと予言する（同、p.92）。ぶら下がる瓢箪の実や斬られた生首が性器に、生首が吐きかける唾が精液にいわば同一化され、地上の男と地下の女とによる象徴的な性的交わりから豊穡の源となるトゥモロコシが大地に生成される。いずれの話もグロテスクな祭儀や神話である。

中央アメリカ大陸に栄えたそのアステカ帝国の儀礼は、事実いかにも血なまぐさい供儀のオンパレードで、神殿の壁面には、祭司たちによって切断された生け贄たちの頭蓋骨がびっしりと並べられていた。アステカ神話の地母神コアトリクエは、蛇というその名にふさわしくそのスカートはとぐろを巻いた蛇、胸元には人間の心臓と手首をつなぎ頭蓋骨を下げた首飾りを着けていた。征服者コルテスに同行して記録を残したベルナル・ディアスは、ショコランの広場には「人間の頭骨の山があり、(…中略…)頭骨が一〇万個以上あったのである。」(マーヴィン・ハリス『ヒトはなぜヒトを食べたか：生態人類学から見た文化の起源』鈴木洋一訳、ハヤカワ文庫、1997、p.167)と斬首事実の凄まじさを強調している。高山智博『アステカ文明の謎』（講談社現代新書390、講談社、1979、pp.89-153）には、各月の祭の度に生け贄たちが神殿の上でひたすら心臓をえぐられ、首をはねられる儀式が列挙されている（斬られた首が棒に刺されて陳列される図は、同書 p.120を参照）。プレ・インカ文明のひとつ中央アメリカ・ペルーで栄えたモチェ文明（紀元前後－8世紀頃）の月の神殿（月のワカ）の壁画でも、トカゲの怪物が人間の生首をもっている。ペルー北部に残るピラミッド遺跡「エル・ブルホ（魔術師）」からは首斬りのレリーフが発見されている。ペルーのチャビン文化の遺跡セロ＝セチン、いわゆるセチン文化の壁面も、次のように描写されている。

それは砂漠のオアシス都市であった。四〇〇〇年前、突然、チャスマ川の下流のセチンに、約五〇メートル四方、高さ四メートルに達する石の壁で囲われた神殿が造られた。その神殿の石の壁には恐ろしい光景が彫像された。大半は首だけの像。目をえぐられ、頭や口から血を噴き出している。（安田喜憲『日本よ、森の環境国家たれ』中公叢書、中央公論新社、2002、p.18）

こうした首狩り研究の古典的研究の第一ともいうべきものは、ハイネ＝ゲルデルンによるビルマやアッサム地方の首狩り習俗研究（1917）である。その学術論文には、成人式（ハイネ＝ゲルデルン、S. 15ff.）や村の中央の木に打ち付けて飾るロタ族等（同 S. 18）による具体例が豊富に挙げられている。ハットンによるインド・アッサム地方の首狩り習俗研究や、台湾のいわゆる高砂族と呼称された先住民族における首狩りに関する古野清人の研究は、フレイザー同様、農耕におけるそうした豊饒祈願と首の霊力とのつながりを推論している（上記の古野清人著作集 4、pp.45-65）。ちなみに、台湾の首狩りに関しては、台湾総督の叔父をもつ民俗学者柳田国男とその友人の作家田山花袋とが行った台湾旅行記録にそれへの言及があり（大塚英志『伝統とは何か』ちくま新書、筑摩書房、2004、pp.100-102）、また1930年代になると、日本の同化政策に反旗をひるがえした台湾山地の先住民族たちが、多数の日本人兵士の首を狩る事件「霧社事件」が起きている。台湾では首狩りがまだ生きていたのである（津島祐子『あまりに野蛮な 上下』講談社、2008はこの霧社事件を扱っている。南富鎮「『呉風伝説』の朝鮮的な受容——植民地文化研究のための覚え書き——」『人文論集：静岡大学人文学部人文学科研究報告』No. 56-1、静岡大学、2005、pp.1-24）。

そうした農耕の豊穰祈願呪術としての首狩りの理解に対して、20世紀初頭のソビエトの優れた民話研究家ウラジーミル・プロップは、『魔法昔話の起源』（斉藤君子訳、せりか書房、1985年）の中で、メルヘン、特にロシアのメルヘン（魔法昔話）に頻出する断頭等は、現実にも存在したであろうと彼自身が想定する太古の加入儀礼の反映、とみている。例えば、その第三章「神秘の森」の21には、ドイツの人類学者シュルツに依拠して、通過儀礼における加入式でなされる断頭について次のように記されている。

もっと後代の例を見ると、身代わり殺人および、別の人間、新加入者ではない人間、または動物の八つ裂きが行なわれていたことがわかる。捕虜や奴隷が実際に殺された痕跡がある。いくつかの例では、断頭は彫刻を用いてなされた。次に例を若干あげよう。「秘密結社の結社員たちの手で奴隷が殺された。奴隷は八つ裂きにされて、彼らに食われた」。(A. シュルツの著作からの引用) この場合には現実に人間が殺されたのである。クワキウトル族(北アメリカ大陸の先住民族)では、「首が切り落とされた。切った者が髪をつかんでその首を持ちあげて見せたが、それは、頭に死相を浮かべた頭の彫刻だった。彫刻家の技術が許す範囲内ではあったが、この首は踊る人間をおおまかに表現した肖像である」。

(プロップ、p.93、但し、括弧内の補足は高橋による)

プロップのこの解説は、秘密結社の通過儀礼という想定の方にやや引き寄せすぎ、いささか理性的にすぎるきらいがある。というのも、すでにとりあげた例からみて生首や人頭への崇拝は、よりアニミズム的な呪術信仰に深く関わっていると考えられるからである。

内堀基光は論考「共同体と異人」(『現代思想』1974年10月号、青土社、1974、pp.127-131)において、首狩りは首に呪効果があるというだけではなく、狩られて共同体内に持ち帰られた首が、共同体の外から内へと幸をもたらす異人として機能し、首を狩られた者とその名を継承する成人する男子との間にはある種のアイデンティティが発生し、皆から祝福される、として首狩りを異人や他者、共同体のメカニズムから読み直そうとしている。豊饒のための呪術、成人式における象徴的死の体験や霊力の継承等、いずれも説得力をもつ解釈ではある。

9世紀頃の『日本霊異記』(多田一臣校注、ちくま学芸文庫、1997)「人・畜に履まるる髑髏の救ひ収められ、霊しき表を示して、現に報いし縁 第十二」(上巻 pp.115-121)には、髑髏が語る「歌う骨」の話型(AaTh780)に属する呪術的な話が載っている(日本昔話263「歌い骸骨」)。「髑髏の目の穴に生えた筍を抜き取ってやり、祈願すると不思議な現象を示した物語 第二十七」(下巻、1998、pp.204-213)にも、それに類する話が載っている。いずれも骨や髑髏に呪力を感じており、その意味でケルトのブランクの話と遠いようで近い。紀元前17世紀エジプトのパピルスに記されていた、『千一夜物語』の先駆ともいべき杵物語「ウェストカー・パピルスの小話」中の「Ⅲ 魔法使いジェディ」では、魔法使いが斬られた生首を次々につないでみせる(矢島文夫編訳『古代エジプトの物語』教養文庫、社会思想社、1993、pp.73-78)。

こうした事例を見る限り、生首(人頭)信仰とその呪力への関心という点に限定するならば、ヨーロッパであれアジアであれ、中国であれアメリカ大陸であれ、さらには日本であれ、さして違いがあるわけではないようである。違いがあるとすれば、早い段階に首狩りから離脱したかにみえる西洋文化においてこそ今なお斬首への偏愛が顕著であること、そしてかつて自身が首狩り族であり、今も内的な首狩り族であり続ける自己自身の存在様態や衝動に対する自己認識が、その事実や衝動の深さに反比例するかのように深く隠蔽され峻拒されている、という二重性の有無であろうか。

その二重性がいわゆるトラウマ(心的外傷)として西洋人にとりつく。ヨーロッパの社会と文化の根底では、首狩り族としての人頭崇拜は、近代精神や脳科学による理性や脳の過大評価に支えられて、個人の頭部と理性への突出した優位的評価にすりかえられ、原始的で呪術的な生首観念は意識の水面下に押し込められる。そのため、今なお隠然たる力をふるっているにもかかわらず、首狩り族というむくつけき出自と本性は、啓蒙と理性を核とする高度な文明の徒ヨーロッパ人には最も似つかわしくないものとして意識レベルでは峻拒され、意識下の領域へと深く隠蔽されることになる。しかしながら、フロイトの理論が示すように、トラウマは抑圧によって解決されるわけではなく、むしろその逆で、生首狩りへの押さえがたい衝動は抑圧されたそのことによって昂進し、理性的意識を欺く狡猾な回路を創り出して多孔的に噴出する(Cf. ジークムント・フロイト『精神分析入門(上)』高橋義孝訳、新潮文庫、2005、第十八、十九講、pp.382-423)。意識と理性によっては決して容認されないものの、その首狩りトラウマは、今もって、あるいは頭部への過重が過大となりつつある今なればこそ、いよいよ健在とな

るかにみえるのである。

意識下に抑圧され隠蔽されたその衝動は、姿をかえて変奏され、あるいは異なるものに置換されることによってさりげなげに遍在する。

エクス＝アン＝プロヴァンスにほど近いところに、アントルモンの要塞がそびえ立っている。アントルモンは城砦都市で、紀元前二世紀には、サルウィの人たちが形作るケルト＝リグリア連邦の首都として栄え、紀元前百二十四年に、カイウス・セクストゥス・カルウィヌスによって破壊されている。この都市に住んでいたガリア系の首狩り民族は、彼らの頭蓋崇拜の遺物をのこしている。それは戦利品としての敵の頭部の数々で、彼らはそれに防腐処理をほどこし、杉の油に漬け込んで、家の壁にぶら下げたり、寺院の壁のくぼみに安置したりできるようにしたのである。

(ジュリア・クリステヴァ『斬首の光景』星埜守之訳、みすず書房、2005、pp.35-36)

地中海に近い南フランスにあるアントルモンの要塞の遺跡が明証しているような人頭崇拜衝動は、南フランスに限らず西洋文化のうちにさまざまに姿を変え、さりげなく、時には荒々しい形で噴きあがる。例えば、南欧ルーマニア出身のフランスの女性思想家ジュリア・クリステヴァは、その近著『斬首の光景』において、フロイト的な深層心理分析を基本として、斬首や生首の造形と表現に無意識的、意識的に拘泥してきた実例をあげながら、西洋文化が頭蓋骨や生首といういわば一種のトラウマ（精神的外傷）に囚われ、斬首に執拗にこだわりつつも、しかし意識はその衝動とその遂行を知らず、また認めないといった、ひどく屈折した特殊の状態が繰り返し発生し続ける系譜を明らかにしようとしている。クリステヴァは、こうした多くの頭蓋崇拜には母の原初的喪失と男根的試練という二つの出来事の記憶がとどめられているとし（同書、p.26）、人は父と母とに二重に同化したことによって同性愛へといたり、そのことによって殺人と近親相姦への欲望を昇華する。そしてその昇華の果てにいわゆる法の制定が発生する、とする（同書、p.28）。つまり、斬首によって世界を、少なくとも西洋世界を解説しようとしている。「斬首があろうとなかろうと、あらゆる光景は首の実体^{トランススブスタンスション}変化にほかならない」（同書、p.1）からである。

そうした西洋的トラウマは、欧米メディアが制作した現代のドキュメンタリー番組に典型的に現れてくる。例えば、イギリス BBC テレビが制作したドキュメンタリー番組は、非常に質が高く、その出来ばえにはいつもとても感心させられるが、その内容の濃さ、着眼点の見事さ、論理的追求力の強さ等による抜群の面白さに比して、画面の撮り方においてどうも単調になるという奇妙な傾向を示す。単調という以上にどこか窮屈で息苦しくさえあり、日本人としてはひどくくつろげないことが多いのである。それは内容の密度の濃さ、主題追求の迫真性ということとも違っている。その窮屈さは、彼らイギリスや西洋の人々の視線と関心、すなわちテレ

ビカメラのレンズ照準が、あまりにも問題について語る人物にのみ、より正確には、人物の頭部にのみ集中しすぎていることに起因する。

これは、日欧のテレビのドキュメンタリー番組を単純に比較してみれば一目瞭然である。日本のドキュメンタリー番組では、人間は自然や環境にゆったりと包まれ、いわばそれと親和するかのように柔らかに存在している。日本の文化伝統を反映してか、人間はそれ自体では十全となりえず、自然と融和し、自然に連続したものとして感受されているのである。撮影の対象となる問題渦中の人物であっても、その姿勢は変わらない。それゆえ、人物と人物との映像の間にも、主題とは一見したところ直接に関わりがあるとは思えない周辺の樹木や花、なにげない自然の風景映像等がさりげなく挿入され、当該の問題から一瞬ふっとはずれて、ゆったりとした自然な間や、静かな息づかいとでもいった広がり志向される。理詰めではなく、肩の力を抜く静謐な瞬間を必ずや必要とするかにみえる。人の思想や考え方、行動さえも、彼らをとるまわりの自然の風景やゆったりと流れる生活の時間とやわらかく調和させようとする目に見えない意志と感性が、強く働いているようにみえるのである。

それに対して、西洋で制作されたドキュメンタリー番組の方法論（ドラマトゥルギー）とカメラのレンズは、主題に関係する人物の行動と見解にのみ、すなわち人物たちが自身の意見を語るその頭部にのみ集中する。賛成意見であっても反対意見であっても、カメラの眼がとらえようとするのは、ひとえに人物たちの頭部のアップだけといっても過言ではない。いいかえるならば、ドキュメンタリー番組とは、現前する頭部の連鎖、生首の数珠つなぎとして構成される。つまりある思想が、ある出来事が問題となっているならば、カメラはそこにのみ集中し、その問題を語る人物たちの顔を延々アップして撮っていく。すべては頭部、すなわち個人の生首の連鎖に収斂するのである。日本の番組におけるような、テーマとは直接関わりなく挿入される自然の風景への逸脱や自然との親和傾向等はほぼ皆無で、欧米のドキュメンタリー思考の中にそのような融和性が入りこむ余地など、まずもってありえないのである。

こうした方法論の差異は、ひとつには欧米と日本との自然に対する基本的な姿勢（西洋の反自然 VS 東洋・日本の自然との親和）や、余計な要素を排して問題点のみをひたすら論理的、集中的に考察しようとする西洋特有の論理性の有無、あるいは論理性の濃度の違いに由来していると思われるが、それと同時に、制作者たちがそれを意識してのことなのか、それとも無意識裡になのかはともかくとして、少なくとも現代の欧米文化には、顔や頭部をこそ極度に偏重する強い性癖があることは否定できない。

2 西洋文化2つの源流——古代ギリシアとケルト

西洋文化の基底と源流は、一般に2つあるとされている。ヨーロッパの思考の基本的なものをほとんど案出してしまったかの趣さえある驚異の古代ギリシアや、西洋の実践的な型を確立

したとされる古代ローマとによる地中海文化等のアルプス以南の文化、そしてヨーロッパ全域にわたる広い文化圏を擁していたケルト人と、その後やってきたゲルマン人たちとによるアルプス以北の文化との2つである。そこにキリスト教が寄生する。ところが、面白いことに、その南北いずれの文化とも生首とは縁が深く、特にケルト人やゲルマン人たちは、はるか昔から首や頭を飾る首狩り族としての生々しい伝統をもっていた。

古代ギリシアの神話中最も有名な怪物は、英雄ペルセウスの鏡によって退治され、後にアテネ女神の盾や甲冑の胸部ないしは山羊皮製の楯アイギスにすえつけられた女怪メドゥーサの生首である。髪はうごめく蛇、その眼を見た者はすべてたちまちのうちに石と化す、といわれる恐怖の生首である。この生首メドゥーサの最古の源流ともいべきものは、楔形文字で刻まれた古代メソポタミアはシュメル文化に起源を有する古代バビロンの叙事詩『ギルガメシュの冒険』の中に、森の象徴として登場する怪物フンババである。口からは火を吐き、顔の中央には目が一つあり、それによって見つめられた者は石化する。このいかにもメドゥーサの属性を帯びた怪物フンババも、メドゥーサ同様英雄ギルガメシュたちに断頭され、ここから森を破壊する人類の都市文明が本格的に駆動することとなる（H. ガスター『世界最古の物語』矢島文夫訳、現代教養文庫、社会思想社、1973、p.43-44. Cf. 岡田明子、小林登志子『シュメル神話の世界——粘土板に刻まれた最古のロマン』中公新書1977、中央公論新社、2008、第八章、pp.231-238、アッカド語版）。ちなみに、自衛隊の海外派遣で争点になっていたイージス（アイギス）艦は、敵を睨み石化させるこのメドゥーサの生首が秘める無敵の力にちなんで名づけられたものである。イスラム圏のトルコでは、このメドゥーサの生首と眼の呪力に対する民衆の崇拝は、ナザール・ボンジュなるメドゥーサの魔眼をかたどった、邪眼を祓うお守り石へと引き継がれ、今なお命脈を保っている。

このメドゥーサ退治を、20世紀半ばに活躍したドイツの人類学者イェンゼンは、同時代人である神話学者ケレーニーとともに、インドネシアとニューギニアの間に位置する香料群島モルッカ諸島の中のセラム島に伝承されていた「ハイヌヴェレ神話」と儀礼に接続させる。

アテーネーは《ぶん取った》首を楯の上にしっかり固定する。ちょうど首狩り民族について、彼らが戦利首級を腰帯に取りつけると報告されているように。別の所伝によるとメドゥーサの首はアテネの市場のある小山の下に埋められたというが、このことは未開諸民族において広く分布する戦利首級を新しく建設する神殿の主柱の下に埋めるという風習を想起せしめる。

こうした細部すべてはきわめて明瞭に、メドゥーサ殺害神話が首狩りと戦利首級の儀式的処理の圏内に属し、メドゥーサの首そのものが今日セラム島でなお説話に見出されるあの首神の一つであることを示している。

（AD・E・イェンゼン『殺された女神』弘文堂、1981、pp.117-118、cf. p.64、原書1966）

二人は、つまり、メドゥーサ斬首という怪異な伝承を古代ギリシアにのみ特有の孤立した神話的エピソードにとどめるのではなく、ヨーロッパの原点である古代ギリシアの習俗を、アジア等に現存ないしは伝承され確認しうる生きた原始的習俗と連続性をもつものとして、世界に広くみられる首狩り習俗のネットワークの中に組み入れ、それを世界的視点から考察しようと考えたのである。

セラム島のハイヌヴェレ神が豊穡に深く関わっていたように、この女怪メドゥーサもまた、ヘシオドスによって同じく悪役へと貶められたパンドラと同様、本来は自然や大地の恵みを与える豊穡の母なる女神であったと推測されている。そうした先住民族たちの母と大地の信仰を制圧し、恵みの母なる女神たちを、逆に醜怪な化け物に歪めてそれを退治する新たな神話を捏造した勝者、すなわち古代ギリシア人たちの文化とは、したがって、自然(母神／欲望／身体／具体性)を退治し、いわゆる自然の否定である文化(父神／知性／頭部／抽象性)の極へと人類を大きく前進させた文化ということができる。母権的世界を解体し父権の原理を確立する。身体(母・子宮)ではなく、人頭(父・知能)を一元的に崇拝しようとする文化への移行である。そのような歴史観・世界観の刷新を、ヘシオドス等の古代ギリシア人たちは、女神やそれに属する怪物の断頭というメタファーの衣鉢を借りた、神学的転覆によって遂行したのである(ヘシオドス『神統記』廣川洋一訳、岩波文庫、1984)。

その父性原理への転換は、本来はメドゥーサやパンドラと同じく、これまた大地の豊穡の女神であったと想像される古代ギリシアの男性的、戦闘的女神アテネ(都市国家アテナイの守護女神)の奇妙な生誕伝承に典型的に形象されている。人は、そして時に神々もまた、女性の子宮から生み出される。主神ゼウスの娘アテネ女神も、巨人族の娘メティスを母としてその子宮からこの世に誕生するはずであったが、生まれた子が男子の場合その父を殺す、との予言におびえたゼウス神によって、妊娠した妻メティスはまるごと呑みこまれてしまう。だが、激しい頭痛をおぼえるゼウス神の額すなわち頭部をヘファイストス神が槌の一撃でかち割ると、ゼウスの頭部の割れ目から、武装したアテネ女神がこの世に飛び出し産声をあげたのである。この奇妙きてつな生誕の含意するところは、まことに明快である。女性の子宮(身体と欲望)からの産出という、それまでの母権的支配原理に対抗して、男性の頭部(知性)から父権的に、男性的原理によって新しく改造・馴致された女性を産出させようと、イデオロギー的に望んだからである。これは、男たちの手には負えない子宮の無限産出力が、男性原理の頭部によって制御されるようになった画期を象徴的にあらわしている。したがって、そのようにまず子宮から、そして父の頭部から、というように二度生み出された女神アテネは、女性でありながら、それまでの母権制の女神とは大きく異なる母ならぬ処女神であり、そして男性的に武装した戦闘神や後のミネルヴァの梟が飛び立つ知的な守護神としてあらわれることとなった。

だが、父権的原理による母的原理の支配と馴致も、殺されたその怒れる母たちの復讐によって壊滅させられる。そもそも男性的にチューンナップされていたはずの戦闘的な女神アテネの

甲冑の胸にさえも、その出自を示す母なる女神メドゥーサの危険な生首が描かれていたことのうちに、その矛盾はすでに胚珠され、そして頭部にこそ偏った父権的社会的原理への復讐と蹂躪とが、不気味に予告されていた。ギリシア悲劇という偉大な傑作群への幕引きとも引導ともいべきエウリピデスの悲劇『バックスの信女』（『ギリシア悲劇全集Ⅳ エウリピデス（下）』松平千秋訳、ちくま文庫、筑摩書房、1986）において、グロテスクに狂乱する母によって斬られ高く掲げられた王の生首は、その矛盾と予告とが顕現した瞬間、すなわち古代ギリシア文化という理知的な父権的原理が母たちによって獲物のように狩りたてられ、ついには斬首された破滅の瞬間にほかならない。アテネ女神の胸甲に装填されていた生首メドゥーサの秘める無敵の呪力とともに、ヘシオドスによる父権的神話イデオロギーは始まり（『神統記』）、その知的原理によって都市国家アテナイの起源もかたちづくられ持続していたとすれば、他方、そのアテネ的文化原理の崩壊を示す破壊と陶酔の神バックス（ディオニュソス）による王の断頭劇もまた、ポリス国家アテナイと古代ギリシアとが築き上げた偉大なる文化の壊滅と終わりを鮮烈に物語っている。古代ギリシアは、不思議なことに斬首すなわち生首をそのアルファにしてオメガとして、興りそして凋落していったかのようである。

人の肉体を否定したキリスト教も同様である。大地（身体）を睥睨する天空（頭部）を崇拜する牧畜民族の信仰であるユダヤ教を起源として広まっていったキリスト教においても、第一に意味を持つべきは身体（母的欲望）ではなく、頭部（父的精神）すなわち生首であった。特にキリスト教が国教として定着することになった古代ローマ帝国が減びゆく中で、後のキリスト教神学最大の規範となる5世紀の思想家・教父アウグスティヌスが、プラトンを崇めてその精神（イデア）／身体（現象）の二元論を踏襲し、理性の宿る頭（精神）を人の中心と考えたことによって、西洋世界での頭部偏重傾向はほぼ決定的なものとなっていく（アウグスティヌス『神の国（一）』服部英次郎訳、岩波文庫、1982、第一卷第十六章、p.57。『神の国（二）』同、第九卷第九章、pp.254-255、第十卷第二十章、p.358）。他の身体部位に対し頭の方に優位性を認めたアウグスティヌスの考え方は、中世後期13世紀スコラ学の神学者たちにおいても踏襲される（池上俊一『身体の中世』pp.121-125）。その中世後期12世紀頃には、マクロコスモス（宇宙）とミクロコスモス（人間の身体）が対応させられ、教会は「神秘的体躯」というメタファーであらわされ、新約聖書の記述に基づいてキリストがその頭とされる。近代のホップズの『リヴァイアサン』（1651）第二部同様、そこでは国家もまた人間の身体に譬えられ、支配する国王は頭とされた（池上俊一、pp.87-94。Cf. オットー・ベッツ『象徴としての身体』西村正身訳、青土社、1996、pp.20-21、また、新約聖書のキリストを頭に比す記述についてはp.145。ホップズ『リヴァイアサン（国家論）』世界の大思想9、水田洋、田中浩訳、河出書房新社、1974）。

直視することのできないメドゥーサの生首を陰画とすれば、眩しくてやはり直視できない太陽はその陽画である。その太陽も、メドゥーサ同様に頭部のみの図像として描かれてきたことは、いうまでもない（坂内徳明『ルボーク：ロシアの民衆版画』ユーラシア選書、東洋書店、

2006、p.24、18世紀の版画。バーバラ・M・スタフォード『アートフル・サイエンス：啓蒙時代の娯楽と凋落する視覚教育』高山宏訳、産業図書、1997、p.45、図31。伝ベルトラム画黙示録表紙の太陽を着た女、フランシス・ハックスリー『イメージの博物館13 龍とドラゴン』中野美代子訳、平凡社、1982、p.45。高山智博『アステカ文明の謎』講談社現代新書390、1979、p.159、アステカの太陽の石図）。

中世後期に興るユダヤ教の密教ともいべきカバラ思想においても、天地創造の始まりの刻^{とき}に、〈大いなる顔〉が存在し、顔は神性の象徴として高い位置を占める。16世紀プラハの画家アルチンボルドによる神聖ローマ帝国すなわちハプスブルク帝国の皇帝ルドルフ二世を描いた奇怪な肖像画も、そのようなプラハのユダヤ・カバラ的土壌の中から描かれたものである（小岸昭「顔の現象学——ジュゼッペ・アルチンボルド」、鷺田清一、野村雅一編『表象としての身体』叢書「身体と文化」③、大修館書店、2005、p.147）。

太古からの地母神信仰に連なる聖母マリア信仰が、431年のエフェソスの公会議で神の母として承認されるまでは当初異端として排除、弾圧されていた事実も、キリスト教の父権的体制と不可分の、精神偏重すなわち頭部を徹底的に中心とする思考姿勢をよく示す例である（上山安敏『魔女とキリスト教：ヨーロッパ学再考』講談社学術文庫1311、2002、第七章、pp.122-145、p.200）。それ以後、西洋の歴史においては、欲望で穢れた卑賤な身体に対して、気高い知性と霊の宿る頭部こそが圧倒的な優位性と神聖さを獲得し、古代ローマのコインや彫像、肖像を継承した頭部像のみの制作は、韜晦された人頭崇拜の系譜として、16世紀等に作成された石膏の頭部や皇帝のデスマスク（小池寿子『描かれた身体』青土社、2002、p.272、pp.263-264）、切手、現代の各種肖像写真やプロマイドにいたるまで、それこそ途切れることなく延々と続くことになる。

そして、クリステヴァの『斬首の光景』でも列挙されているように、そのような一種の首狩り衝動を、西洋の隠されたトラウマ（精神的外傷）と考えるならば、古代ギリシア神話の英雄ペルセウスが生首を刎ねたメドゥーサ神話を筆頭に、女が男の首を刎ねる旧約聖書のサロメ（ティツィアーノ『サロメ』1555年頃、プラド美術館、等）や旧約外典の女傑ユーディット等の衝撃的な逸話等のように、西洋の芸術・美術において斬首モチーフがなぜか異常なまでに繰り返し描かれ、絶大な人気を誇ってきた創作と想像力の系譜の強靱な持続も、何ら驚くにはあたらない。ラファエロの『聖母戴冠』（1502-3年、ヴァチカン宮絵画館蔵、『聖書美術館3 新約聖書2』毎日新聞社、1985、p.96）の浮遊する天使たちともなると、何と生首に小さな翼だけである。19世紀末に劇作家ワイルドの戯曲『サロメ』（1893）や画家ビアズリーの挿絵『サロメ』（1894）等をはじめとして、おびただしい数の首切り図像の絵画や物語が産出されていった現象や、頸から上しかないチェシャー猫（『不思議の国のアリス』）の愉快で奇矯な出現も、同様にさして不思議なことでもないことがよくわかる。そして、本論第1章でもすでに触れたように、メドゥーサなる特異なこの生首キャラクターは、19世紀初頭のグリム童話集にあっても、

ゲルマンの主神ヴォーダン（オーディン）と並んでとても重要な働きをする隠れた双壁であるといってもよい。

ゲルマン民族の侵攻や強靱な征圧意志をもつキリスト教の布教によって駆逐され、ついには衰滅していった北方のケルト文化にも、その生首がまことに頻繁に登場する。例えば、角のある森の神ケルヌノスの顔の有名な図像もそうで、これは中世の時代、西洋のキリスト教会が悪魔なるものを捏造しようと苦慮していた際に、その図像をモデルとして悪魔の具体的な図像が作りあげられていった、とさえいわれているものである（馬杉宗夫『黒い悪魔と悪魔の謎』講談社現代新書、1998、pp.147-148）。パリー・カンフリ著『図説 ケルト文化誌』（原書房、1998）第2章中の「人頭崇拜」の項には、フランス東部の初期先史時代と、ケルト民族に一般的であった首狩りと人頭崇拜のことが詳しく書かれている（pp.133-144）。例えば、「敵の首を切り落とし、愛馬の首にぶらさげる。（…中略…）家に釘で打ちつける」、「首級崇拜はケルト世界全域に浸透していた」（p.144、下線は高橋。Cf. フランク・ディレイニー『ケルト神話』鶴岡真弓監修、森野聡子訳、創元社、2002、pp.149-150）等と記されている。事実、アイルランドやスコットランドに伝承されてきたケルト民話にも、生首は頻出する。岩瀬ひさみは、その論考「泉の中の三つの首——昔話の背景としての民間信仰」（『説話・伝承学』第11号、説話・伝承学会、2003、pp.133-147）において、ウォレン・E・ロバーツやアン・ロス等のケルト民話研究成果を基に、ケルトの生首信仰と泉との深い関わりを示すケルト民話について多くの例を挙げ検討している。このような生首への強迫観念例をまのあたりにすると、アルプス以南のみならずアルプス以北の系譜においても、ヨーロッパはそもそも首狩り族として現れてきたのではないか、との感を強くする³。

鶴岡真弓著『ケルト美術』（ちくま学芸文庫、2001）は、「人頭を積み重ねたように彫られた不気味な石の彫刻」、「ほんものの頭蓋骨を龕に祀った祭壇」、「ぐるりと人頭を配する」円形の馬具飾り（p.137）等を挙げてケルト文化の人頭に対する異常なまでのこだわりを示した上で、「切られた首」が、座る神の膝に抱かれている点に注目して、ケルトの生首・人頭崇拜を宇宙や大地すなわち自然との一体感への志向として、東洋に近づけ意味づけようとしている（同、pp.137-141。Cf. 本論9頁のアントルモンの聖所）。

ドルイドの教えるケルトの靈魂不滅の観念は、ディオドロスのほか、アンミアヌス・マルケリヌス（ローマの著述家。三三〇ごろ—一九五ごろ）、ポンポニウス・メラ（ローマの年代記作者。一世紀）、カエサル等によって記録されているが、この観念を証す造形として「切られた首」はあるといえるのではないだろうか。古典古代世界では、プラトンが憶測したように、人間の頭部には物事のアイデアを認識する能力である「精神」や「理性」がたくわえられていると考えられたけれども、古典古代人にとっての透明な理性の容器であった頭部は、ケルト人にとっては昏く不透明な闇の力の宿る場としてとらえられている。アント

ルモンの聖所に祀られていた人頭を膝の上に乘せた戦士＝神の像は、死してなお不滅の魂を宿す人頭に、生命の再生をみようとする靈魂崇拜を予想させる。

(鶴岡真弓『ケルト美術』ちくま学芸文庫、筑摩書房、2001、pp.139-140)

ガートルード・ジョーブズの定評ある著作『神話、フォークロア、シンボル事典』(スケアクロー出版、1962)にも、ケルトの生首埋葬が次のように述べられている。

古代人は、偉大な戦士の埋葬された首は、侵入者を追い返す力をもっていると信じていた。頭部の彫像や、死んだ戦士の頭は、危険がくると考えられた方角に正面を向けて埋葬され、民族の守り神となった。(Gertrude Jobes, *Dictionary of mythology, folklore and symbols*, The Scarecrow Press, 1962, p.736, “head buried”「埋葬された頭」の項)

ここに言及されている英雄の首の埋葬は、ケルトの名高い中世ウェールズの説話集『マビノギオン：ウェールズ中世英雄譚』(シャーロット・ゲスト編、北村太郎訳、王国社、1988)中の第二話「ヒリールの娘ブランウェン」に登場する英雄ブラーンの首にも見られるものである。

こんな次第で、大ブリテン島側としても、それなりにうまい具合になったのだが、戦では勝利をおさめたわけではなく、逃がれたのはわずか七人の兵士だけで、ブラーン自身も毒矢で足に負傷したのであった。(…中略…)

ブラーンはおのれの首をはねよと七人に命じた。

「わが首をはねてのち」王はいった、「これをロンドンのホワイト・マウントに運び、顔をフランスに向けて埋めよ。お前たちはしばらく旅に出よ。(…)」

(『マビノギオン』、p.72、下線は高橋)

一同は、気持ちが揺れ動いてじっとしていられなくなり、首を抱いてロンドンへ旅立った。こうして七人は首をホワイト・マウントに埋葬したのであった。(…中略…)首がこの隠れ場所にあるあいだは、海の向こうからこの島に対しての侵略はなかったのだから。

(同、p.76)

ブラーンの死後、七人が流浪を続けた80年の間、英雄ブラーンの生首は腐らずに彼らの旅の友となり、ついには秘かにロンドンの地に埋葬されて呪力を発揮したという。アイルランド建国伝説中の奇譚である。

3 中世の聖堂は生首だらけ

そうしたケルト民族とその文化は、古代ほぼヨーロッパ全域に及んでおり、ヨーロッパは文字通り首狩り大陸であった。映画『スリーピー・ホロウ』（1999）でも陰惨な活躍を見せる、首無し馬にまたがり、「首なし騎士」とも呼ばれる死を予言する者、死神としてあるいは首のない女の姿をした妖精として姿を見せるアイルランド伝承中のデュラハン Dullahan, Durahan は、片手に自分の首を抱えて現れる（Thomas Crofton Croker, *Fairy legends and traditions of the South of Ireland, Part II*, London, John Murray, 1828, pp.85-155. Three volumes in one, A Lemma Publishing Corporation Reprint Edition, New York, 1971. Cf. 那谷敏郎『魔の世界』講談社学術文庫、2003、p.154）。古代ケルトに一般的であったそのような生首伝統はさらに、キリスト教が繁栄した中世後期にはいっても継承されていく。樹木の葉叢から顔だけを覗かせている奇妙な図像、すなわちケルトなどの異教文化をおびただしく蒐集かつ吸収しようとした12世紀頃のロマネスク教会の柱頭彫刻等に現れるグリーンマン（葉人間）がそれである。イギリスのグリーンマン伝承については、カサリン・バスフォード、阿伊染徳美著『グリーンマン伝説』（社会評論社、2004）が、またドイツのグリーンマンについては溝井裕一「2 グリーンマン探訪」に考察がなされているが（浜本隆志、柏木治、森貴史『ヨーロッパ人相学——顔が語る西洋文化史』第三章「異形の顔」、白水社、2008、pp.130-167）、西洋世界と生首志向との異常なまでの関わりを鮮明に示しているものとしては、馬杉宗夫の好著『黒い悪魔と悪魔の謎』（講談社現代新書、1998年）第7章「「葉人間」の正体」を繙くにしくはない。

これはケルトの伝統である「切られた頭」の伝統とも結び付く。ロマネスク聖堂の内部の柱頭や、外部の屋根の下にある軒持送りなどに現れている奇妙な顔（頭）がそれである。ケルト民族は、他の北方民族のように、首狩り族であった。しかし、彼らは戦場において切り取った敵の頭を捨てるのではなく、それらを崇拝したのである。切り取られた頭にあらゆる神的な力が宿っていると信じていたからである。

その力とは、予言、多産、言語の能力、歌などに関するものであるが、そのなかでもとりわけ、悪霊から身を守る力が、それにあると信じられていた。かくして、家の門柱、扉口の上、壁面などを人頭で飾るのは、悪霊的な力から家を守る意味があったからである。家の内・外を人頭で飾る伝統は、かなり根強く残っていたものと思われる。中世、ルネッサンス時代の城館の広間を、鹿の角（または鹿の頭）で飾る習慣も、それは単に狩りの武勇を誇るのみではなく、人頭崇拝の名残、すなわちその部屋を悪霊の侵入から守る役割がそれに与えられていたのである。

紀元1000年を境に、全ヨーロッパで、特に北イタリアやフランスの地で登場して来るロマネスク聖堂とともに、その聖堂の外部を飾る軒持送りや、内部の柱頭彫刻に人頭が現れ

たのは、キリスト教以前のケルト民族の伝統の復活とみることができるであろう。特にアイルランドやイギリスでは、人頭崇拜の伝統が根強く残り、クロンファート (Clonfert) では、ロマネスク時代の聖堂ファサードの破風の部分に、人頭は五層にもわたって並べられている。ここでは柱頭とか半円帯状の弧帯の部分にまで、人頭（時には動物の顔）でうめつくされており、一見不可思議な世界を形作っている。しかし、キリスト教世界では不可解な主題も、ケルトの伝統を知った今は、その意味がおぼろげながらわかってくるのである。

「葉人間」と人頭崇拜の伝統は、次のゴシック時代には、よりリアルな感覚を持って受け継がれる。「葉人間」は、写実的な葉の描写のもとに、大きな目と口のみを出して、ヴォールト（穹隆）の要石、軒持送り、柱頭のみでなく、説教壇などにも現れて来る。フランスでは、シャルトル、ディジョン、ル・マン、ブルジュ、ボワティエなどの大聖堂に、英国では、ノーリッジ、イリー、エクセター、ウィンチェスター、リッチフィールド、サウスウエルなどに、ドイツでは、バンベルク、フライブルク、マールブルクなどの、いかにもケルトの伝統の強い地方で「葉人間」が出現しているのかがわかる。（馬杉、pp.153-155、下線は高橋）

ウィリアム・アンダーソンとC・ヒックス共著の『グリーンマン』（河出書房新社、1998）には、そのような顔だけの写真や図像が数多く載せられていて、文字どおり頭すなわち生首のみのオンパレードである。このような頭部図像が古代から脈々と継承されていった末に、中世のロマネスク、ゴシック様式の巨大な教会の柱頭彫刻等の夥しい生首像群となって現れたわけである。グリーンマンと門扉との深い関わりについては、上記溝井の論考の中でも指摘されているが（pp.144-150）、『マビノギオン』の聖ブラーンの生首に威力が示されていたと同じ呪力が、キリスト教会の入り口を庇護しているのである。それは、ひとつには、呪力そのものは求めても簡単に得られるものでもなく、新たに創り出すことのむずかしい、先行する世界のそれを継承するよりないものであるからであるが、それでいて、逆に一度発生すると、今度は容易に消去することができないやっかいなものでもあったからである。そこでは、異教ケルトの呪力がしぶとく生き残り、ロマネスクのうちに流入したのである。

ケルトの衝動と文化的遺伝子が、地中海の古典古代やキリスト教による文化的遺伝子といつしか融合する。すると、その強力な呪力は、エイリアンしながらに、キリスト教の強固な教義をも食い破り、キリスト教の枠組みの底から、かつてのおどろおどろしい人頭崇拜衝動が、今やキリスト教らしく一見清らかな聖像にすがる形で、しかしながら、抑えがたく滾るように噴きあがってきたわけである。

その欲動は、もちろん間接的には韜晦的に表出される。例えば、スペイン・ハプスブルク家がその覇権を謳歌した16世紀の石臼・車輪型のラフ ruff（ひだ襟飾り）—— いわゆる南蛮人ス

タイル——は、不必要なまでに首を絞める形式にこだわる一種の首斬りファッションである（アドルフ・ローゼンベルク著『図説 服装の歴史』上巻、飯塚信雄監修、高橋吉文・土合文夫訳、国書刊行会、2001、p.388）。その3世紀後そのスペインにも匹敵する覇権を握り、「パックス・ブリタニカ（大英帝国の平和）」を謳歌した19世紀大英帝国ビクトリア朝時代の、これまた立ち襟等で頸を極度に窮屈に締めつけるダンディ・ファッションも、黒服への共通した急傾斜とともに、スペインの首斬りスタイルに通底している（ジョン・ハーヴェイ著『黒服』、太田良子訳、研究社出版、1997、pp.29-30）。精神の首斬りが、世界を制覇した者のいわば責任や良心の呵責として、それゆえ疚しさのすり替えとして、自己自身の首にあえて厳しく課せられた、とこれは推測されうるものである。だが、帝国の破滅時にもまた、首斬り図像は死神とともに襲来することがある。19世紀末から20世紀初頭のいわゆる「ウィーン世紀末」の画家クリムトたちに取り憑いていた首斬り図像やファッションも、そのトラウマの無意識的な表象である⁴。

その欲動は、しかしまた直接露わにも表出される。皇帝の横顔を刻印した古代ローマ時代のおびただしいコインや、後代の頭部彫像や肖像絵画、デスマスク、それに類する現代の肖像写真やテレビ番組等における顔のアップ、女性ファッション雑誌等の表紙を飾る美女たちの顔の写真はもちろんのこと、アイドルたちの笑顔ふりまくプロマイドやグラビア写真、選挙ポスターにおける立候補者たちの写真、それどころか、私たちの各種身分証明書に貼り付けられる顔写真等にいたるまで、生首図像はおびただしいまでに氾濫し、首狩り族としての西洋がとりわけ拘泥する生首斬首・崇拜衝動遺伝子は、世界を制覇した西洋世界による薰陶よろしく、西洋の狭い圏域をはるかにこえ、今なお、ないしは今こそ強靱に生き続け、不気味に繁殖して世界を覆いつくさんとしているのである（西洋に一貫し今も持続するロゴス崇拜と一神教的思考の世界的風靡については、ピエール・ルジャンドル「第一講演 西洋が西洋について見ないでいること」、『西洋が西洋について見ないでいること——法・言語・イメージ【日本講演集】』、森本庸介訳、西谷修解題、以文社、2004、pp.27-68を参照）。

そのようにグロテスクな生首の彫像や浮き彫りが、そもそも西洋の聖なる空間である教会や聖堂、あるいは荘厳であるべき宮殿等を麗々しく飾っていたという異常な事実、私たち日本人としてはまずもって驚かされるが、教会や国家権力を握っていた知識人たちに牛耳られていた一般民衆のレベルにおいても、事情にそう大きな違いがあったわけではない。例えば、日本でいえばお地蔵さんやお稲荷さん等のように病気からの快癒、金銭の幸運、出世、色恋の成就や恨み等、民衆の素朴で現世的、物質的な欲望をかなえてくれる神秘的な力をもったキリスト教の殉教者たちを一般に守護聖人と呼ぶが、この信仰は、かたぐるしくて抽象的、民衆にはさっぱりわけのわからない教会の正統的な教義の世界とは根本的に異なり、ひたすら身体的で具体的ゆえわかりやすく、日本の民間信仰とも共通するところの多いものである。だが、民衆の間で絶大な人気を誇っていたこの聖者信仰にあっても、断頭図像や聖者の頭蓋骨はことのほか愛好され、例えばフランスの聖者ドゥニ（ディオニシウス）は、刀や斧で首を切られて殉教した

ことを示すべく、手に自身の生首をもって描かれる (Lutz Röhrich: Das große Lexikon der sprichwörterlichen Redensarten Band 2, Herder, 1992, S. 871. Erna und Hans Melchers: Das grosse Buch der Heiligen. Geschichte und Legende im Jahreslauf, Südwest Verlag München, 1985, S. 656ff.). 民衆においても画家たちにおいても人気の聖女、アレクサンドリアの聖女カタリーナも斬首されるが、生首が胴体と分断されても血は一滴も流れでない (Melchers, S. 763-766)。同じく民衆に人気の高い聖女ドロテア (テオドーラ) の場合は、斬首される直前に、真っ赤なりんごとこれまた血のように赤い薔薇の入った果物籠を手にした天使が現れる (同, S. 94-95. Cf. クリステヴァ, p.119)。夏目漱石初期の連作集『夢十夜』第十夜の「籠詰」 (『文鳥・夢十夜』新潮文庫、2007、pp.60-61) すなわち果物籠や、最晩年の遺作『明暗』 (百八十三) (新潮文庫、2006、p.579) の終わり近く温泉宿で清子が重そうに運ぶ意味ありげな果物籠と同じで、この天使の籠もまた、図像的にはドロテア自身の斬られて血で真っ赤に染まった生首を幻視・象徴するものである。その斬首モチーフを用いる19世紀スイスの小説家ケラーの短編 (聖譚) も、この聖女とその首斬りの民衆における浸透の一端を示すものである (Cf. Gottfried Keller, Sämtliche Werke in drei Bänden, II, Hanser, 1970. “Dorotheas Blumenkörbchen”, In: “Sieben Legenden”, S. 600, 邦訳『七つの伝説 他一篇』堀内晃訳、岩波文庫、1987、pp.96-109「ドロテアの花籠」)。

その彼女ら以上に斬首モチーフがあらわにされているのが、磔刑の執行されるゴルゴダの丘へと十字架を背負い歩むイエスの汗をぬぐった折に、その顔が布に写されたとされる聖ヴェロニカである。この聖女ヴェロニカの聖布に対する後代の人々の熱狂は、ヨーロッパの民衆の心の底辺に生首への強い信仰がなければ成立しえないものである。1212年頃に英国のティルベリのゲルヴァシウスが著した『西洋中世奇譚集成』の第二四章「今一つの主の御顔」には、イタリア・ルッカの町に運ばれたニコデモ制作の「ルッカの聖顔像」の奇譚が記されている (講談社学術文庫1884、2008、pp.59-64)。つまり、知識人層に劣らず民衆においても、生首崇拜衝動は、ラテンやゲルマンを問わずあからさまに露呈されていたのである。

画家たちも、その斬首や生首を好んで描いた。高度な美術品の蒐集されたヨーロッパの数多くの著名な美術館を巡ってみれば、その嗜好傾向は歴然たるもので、祭壇画や絵画に描かれた生首や断頭処刑図は、先ほどの群れなすヴェロニカ図 (聖ヴェロニカの画家『聖ヴェロニカ』1420年頃、ミュンヘン・アルテ・ピナコテーク蔵、等) とともに、例えば、ウィーン美術史美術館所蔵のクラナハ描く名品『ホロフェルネスの首をもつユーディット』 (1530年頃)、ウフィチ美術館所蔵のディートリク・ボウツ画『皇帝オットーの裁き』 (1470-1475年頃) 等を初めとして、それこそ山また山のおびただしさに現れる。「中世で大きなインパクトをもったのは、切られた頭である。切られた頭についての史料は、枚挙にいとまがない。」 (池上俊一『身体の中世』ちくま文庫、pp.122-123) つまり、民衆にせよ知識人たちが深く関わっていた教会にせよ、はたまた王宮の権力中枢にはべり富と栄誉を手にしていた芸術家たちにせよ、断頭図を好むこ

とではいずれも人後に落ちなかったのである。

19世紀初頭は、西洋による植民地支配システムが近代的なものへと刷新・強化された大きな転機をなす(ウォーラステイン『脱＝社会科学：一九世紀パラダイムの限界』藤原書店、2000、pp.18-19)。植民地支配のためのより科学的な方法論を確立することを主目的として西洋に興った民族学や人類学は、自分たちを光としそれ以外を闇とする18世紀啓蒙主義の衣鉢をつぎ、首狩り族をメラネシアやアマゾンの原住民、アフリカのバントゥー族等に見いだし、自分たちの啓蒙された理性と異なるあまりの野蛮さに驚愕してみせた。そして、その当の西洋文化自身が、ケルトやゲルマン、古代ギリシアの世界に首斬りなる風習の存在したことは歴史的知識として知ることはあったとしても、自分たち自身が古に首狩り族であったという事実、その西洋社会が今なお生首への衝動に執拗に拘泥し続けている事実が声高に語られることは、当然のことありえない。いいかえれば、斬首への抑えがたい欲動も、西洋文化の不可視かつ不可知の根底領域(深層意識)に押し込み隠匿されていくのである。少なくともクリステヴァでのように稀に、斬首欲動が精神分析という一種理性化された範疇内で病理学的に語られることはあっても、“首狩り”という原始的カテゴリーの持続の中で生々しく語られるということは、まずもってありえないのである。

しかしながら、ウィーンやミュンヘン、ハノーファー等、西洋文化が誇る巨大で豪華な庭園や壮麗な館をゆったりと散策してみるならば、私たちは、ロマネスク教会や貴族たちの館に劣らず、古代ギリシア神話や古代ローマの歴史や聖書等に材をとった胸像や獣たちの頭部等が、異様なまでに満ちあふれている怪異な光景にはいくらでも出くわすことができる。大理石によって制作されたそれら白い彫像群は本当に美なのだろうか。それを無条件に美しい、良しとする西洋的先入見を排して、素直な目で眺めてみるならば、庭園や宮殿が誇る豪華な威風も、トゥーランドット姫や、男を峻拒するそれと同類の王女たちが、生首や頭骸骨を杭に刺して飾り権勢を誇っていたあのグロテスクな光景や、異族との闘いにおいて獲得した首級を自分の屋敷の周りにずらり並べて誇示する密林の首狩り族の館と、寸分異なるところがない。つまり、首狩りが深く浸透している西洋社会がつくりあげた現代世界のいたるところで、私たちは、その斬首文化にどっぷりと浸り様々な首狩りの遂行に晒されていると同時に、その恩恵と美的感覚の洗礼を存分に享受して生きているのである。

その異形なる光景にもかかわらず、生首世界の異様な実態はなぜか等閑にふされ、戦慄とともに語られるなどということはまずもってない。現代の私たちが、宮殿等のそうした頭部彫刻を見ても別段奇異な思いや衝撃にとらわれない、それどころか、時にはそれらを当たり前の自然なもの、ひいては心を打つすばらしい芸術とさえ感じてしまうとすれば、それは私たち日本人が明治維新以来、西洋文化の発想に強く憧れ、みずから進んで深く洗脳された末については馴致されてしまった結果にすぎない。なぜなら、明治時代まで日本では合戦の時の首級か、獄門の刑罰か、祭や能での仮面か、ないしは赤穂浪士が「エイエイ、オー」と叫んで掲げるあの

吉良上野介の生首か、その変形であるろくろ首のようなお化け等のいくつかの特殊ケースを除けば、頭部だけが日常的に戸外に晒され、しかも美的に賛美されるなど、基本的には考えられなかったからである。

木下直之著『美術という見世物』（ちくま学芸文庫、1999年）には、西洋世界を初めて訪れた明治維新前後の頃の日本人が、そうした頭部像群に遭遇して味わったであろうカルチャー・ショックを典型的に示す逸話が載せられている。万延元年すなわち1860年のことである。

江戸幕府がアメリカ合衆国に派遣した使節団の副使、村垣淡路守範正は、ワシントンの大統領官邸（ホワイトハウス）を訪れた時の印象を次のように日記に記している。

我寺院の無住の本堂に似たり所々の鴨居の上に白石もて造たる首あり代々の大統領の首なるよし我国の形罰場に見しにひとし

現代人には不思議でも何でもない首から上の肖像彫刻を受け止めるために、村垣は晒し首のイメージを思い浮かべねばならなかった。また、国会議事堂では、目にした彫刻を「白石の仏像めきたるもの」と表現している。（「石像楽園」、『美術という見世物』ちくま学芸文庫、筑摩書房、1999、pp.29-30）

つまり、西洋の建物、ホワイトハウス内にずらり陳列されている歴代大統領たちの首から上、ないしは胸から上の胸像に初めて触れた時、幕末の日本人は獄門の晒し首かと仰天したのである。首から上だけの像に当時の日本人が触れることなど、歌舞伎の首実検か、江戸後期の画家白隠描くところの「達磨図」（辻惟男『綺想の図譜』ちくま学芸文庫、2005、図70、p.169）等を特殊な例外とすれば、絵画においてさえもほとんどありえないことであったからである。顔が特に強調されているはずの似絵や浮世絵を想起してみても、たしかに顔だけといった図像はまず皆無であったことに気づく。役者をデフォルメして描いたあの写楽の奇矯な大首絵、例えば「三世佐野川市松の祇園町の白人おなよと市川富右衛門の蟹坂藤馬」（東京国立博物館蔵、辻惟男『綺想の図譜』ちくま学芸文庫、2005、図98、p.225）等、西洋の生首風肖像画にかなり接近しているものもないではないものの、それでも生首だけという極端な例はまずもって見あたらない。西洋伝来の頭部彫刻や肖像画は、つまり日本人にとって決して自明のものではなかったのである。

こうした異常とも思える生首的頭部像や構図に西洋文化が拘泥してきたのは、まず第一に西洋社会が、身体や風景すなわち自然という不可解な全体を畏れるのではなく、人間や人格的な神の方を絶対視して自然を蔑視し、知性が宿る人間の頭部すなわち人間の理性や意識に対する偏った強い信仰と、不遜なまでの盲信や偏愛を異常なまでに発達させてきたためである。だが、

アルプス以南の文化に発した流れだけではなく、特にケルト・ゲルマン系の文化の支配がおよんでいたアルプス以北の北方の領域からも、首狩り族としての抑えがたい人頭崇拜衝動が、西洋文化に根底的な衝動のひとつとして潜み、そして発現するのである。

4 世界の説話に見られる生首

西洋文化に潜在するこうした首斬りへの強い衝動は、当然のことながら、人の心や心性を鮮明に映し出す口承の物語群の中にしっかりと刻印されていく。グリム童話 KHM57「黄金の鳥」の末尾では、親切な狐くんが、どうか私の首をはねてください、と主人公の王子に懇願する。斬首すると狐の魔法が解けて王子が出現する。KHM5「忠臣ヨハネス」も首斬りが反復される優れたメルヘンである。しかし、首斬りといえはまず連想される説話は、中世イギリスは14世紀後半に書かれた作者不明の、非常に有名なロマンス(物語詩)『ガウェーンと緑の騎士』である。これは、ケルト神話アルスター物語の中の「王者の取り分」で繰り広げられる首斬り試練の挿話を継承したもので、この挿話はアイルランドからウェールズに伝わり、そこから仏独等のヨーロッパ大陸の物語に入り込んだといわれているものである(プロインシアス・マッカーナ『ケルト神話』松田幸雄訳、青土社、1991、pp.203-204)。ロマンスの冒頭、緑の騎士なる謎の豪傑が、突如馬を駆って主人公ガウェーンの前に姿を現し、彼を激しく挑発する。そして、あろうことか、謎の緑の騎士は、怒った騎士ガウェーンに自分の首を切り落とさせる。

緑の騎士はすぐさまに身構えた。
頭を少し前に屈め膚を現わし、
その長く美しい髪を頭上に掻き上げ、
待ち構えてあらわな首をのぞかせた。
ガウェーンは斧を握りしめ、両手で振りかざし、
右足を大地に一步踏み出し、
素早くあらわな膚に振り下ろした。
鋭い刃先は騎士の膚を裂き、
美しき膚肉に食い込み、それを両断し、
その輝ける鋼の刃先は大地を切り込んだ。
美しき頭は首から大地に落ち、
多くの者達に足蹴りされ転がった。
血潮が体からほとばしり、緑色の上でぎらぎらと光っていた。
それにも拘らず、騎士はよろめくことも倒れることもなく、
足取りも確かに大股に歩み出て、

人々の立並んでいる所で、気味悪く手を差延べ、
その美しい頭を掴んですばやく高く差し上げた。
それから馬に近づき手綱をとり、
^{あぶみ}鐙に足をかけ馬上の人となったが、
頭の毛を掴みしっかりと手に抱えていた。
何ごとも起こらなかったかのように、
頭がないにも拘らず、騎士は鞍にしっかりと腰を据えていた。
そして頭のない、血の滴る
その醜い胴体を彼はねじ曲げるのであった。

(…中略…)

緑の礼拝堂に来て、貴殿が拙者に加えた返しの一撃を
受けられよ。元旦の朝に
即刻に一撃をしかと受け止めるのだぞ。

(『ガウェーンと緑の騎士：中世英文学のロマンス —— ガーター勲位譚』瀬谷広一訳、木
魂社、1990、pp.37-39、下線は高橋)

それだけではない、騎士ガウェーンもまた、このロマンス(物語詩)の後半、緑の騎士のはなっ
たこの不敵な挑戦に応ずるべく、みずからの首を斬られに指定された緑の礼拝堂へとやってく
る。首斬りというクライマックスが、物語の初めと終わりとは、いわばきれいな対称形(シン
メトリー)をなすように明快に配置されているのである。物語の鮮やかな展開といい、切られ
ても死なない非現実性といい、これはほとんどメルヘンのような内容の、みごとなロマンス(物
語詩)といってもよいが、それでも斬首合戦を軸としたその構成と内容の異様さは、私たち日
本人にしてみればやはり衝撃的としかしいようがない。

だが、すでに例示したように、人頭崇拜は、西洋をも含むいわば広い範囲にわたって流布し
ていたいわば普遍的な信仰でもあって、それと関わりの深い首斬りもまた、西洋にとどまらず
文字通り洋の東西にまたがって愛好されていたモチーフであった。その典型といえるもののひ
とつは、広い流布を見せる「二人兄弟」の話である。極めて古い起源をもつのではと推測され
ているこの話型は、例えば、グリム童話 KHM60「二人兄弟」やアフリカのヨルバ族の類話「双
子の兄弟」や「ウアガド王国史」(山室静編著『新編世界むかし話集 9 アフリカ編』、現代教
養文庫919、社会思想社、昭和52年、1977、pp.191-214、pp.162-163) がそうであるように、そ
の類話のいずれにおいても龍退治等首斬りが何らかの形で関わってくる。

同じく非常に古い起源をもつのではと推定されている斬首メルヘンが、紀元前5世紀古代ギ
リシアの歴史家ヘロドトス『歴史』巻2の121に古代エジプトの話としてその最古の言及がある
「ランプシニトス王の話」(上巻、岩波文庫、1988、pp.235-239。矢島文夫編訳『古代エジプト

の物語』の「ランプシニトス王の宝」、pp.175-178) である。古代エジプトが起源かどうかは不明だが、父の首が子によって切断され捨てられる実に印象的なこの話 (AaTh950) は、その古さを例証するかのように広く世界に流布しており、例えば東は、仏教経十二部経の1つで主に釈迦仏の前世による因縁を語る古代インドの説話集『ジャータカ (本生譚)』中の説話 (紀元前3世紀頃) を基とする『大蔵経』の『生経』の類話から、漢訳仏典『法苑珠林』中の中国版の話に変形され、そしておそらくは後者に通じた僧侶を介して、我が国日本の地にも伝播する。『今昔物語』巻十の「震旦^{しんだん}の盗人、国王の倉に入って財宝を盗み、父を殺す話 第三十二」(東洋文庫383、平凡社) がそれである。一方西は、同じ12世紀頃にアラブ世界から西洋世界に伝播かつ流布していったと考えられる驚異の説話集『ローマ七賢人物語』(邦訳は『七賢人物語』未知谷、1999年、等) 中の宝蔵破りの話 (『宝物庫 Gaza』) として、いわゆる Latin H 版 (ラテン語H写本) から翻訳されるという形をとって西洋諸国へと伝えられていった。それらの経緯の紹介や比較を行っている松原秀一によるその要約を引用してみよう。

ローマのオクタヴィアーヌス帝の時、『三日月』(満ちて行くもの) と名付けられた塔があった。皇帝は金銀を収めてこの塔を一人の賢人 (異本の一つである『継母物語』では、ローマ七賢人の中の二人) に託した。ここに二マルク銀貨でも手にしようものなら、すぐにうまい物に使うような男がいて、貧乏になってしまい、息子呼んで宝蔵破りを持ちかける。
(…中略…)

盗みは毎晩続くので番人の賢人はある日、財宝の減ったのに気付く、侵入箇所を発見するが騒ぎ立てずに、信用できる四人の部下に、侵入口の下に堀を掘らせ、糊を満たした桶を設置させる。夜、いつもの如く塔に入った父は桶に落ち肩まで浸かってしまう。父は息子呼び、自分の首を切り取って持って逃げ、首は他人に見付からぬように捨てよと命じ、
(…中略…)

父の予見したごとく事は運び、父の首を便所に捨てて息子は安楽に暮らした
(『宝蔵破りの話——ランプシニトス王の宝』、松原秀一『東と西の出会い 中世ヨーロッパの説話』中公文庫、中央公論社、1992、pp.297-298。括弧内の補足は高橋)

東は極東の果ての日本から、西は西洋ほぼ全域というその流布の異常なまでの広がりが見られるように、この話の人気はなかなか高く、そしていずれもよくできた話といった印象を与える。『七賢人物語』Latin H 版「5 妃の語る第三の物語 [宝物庫 gaze]」(西村正身訳、未知谷、1999) からその場面を引用してみよう。宝物庫を襲う泥棒の常習犯を捕まえるべく、塔の番人が罠をかけるところである。

穴のすぐ前に瀝青とアスファルトを満たした大釜を注意深く据えつけ、穴から入ってくる

者が、まちがいなくその大釜の中に落ちて二度と立ち上がることができないようにしたのです。(p.57)

(…中略…)

夜、二人は起き出して、塔に出かけました。父親が先に中に入ったのですが、すぐに首まで大釜の中に落っこちてしまい、大声で、「息子よ、来るな、来たら逃げられなくなるぞ(…中略…)

わしが誰なのか、人に知られてはならん！ 早く剣を抜いてわしの首を斬るんだ、首がなければ、たとえ見つかったとしても、わしが誰かということは誰にも分からん。そうすればお前も娘たちも世間の目を気にしなくて済むんだ。」息子が父に、「父さんの言うとおりで、もし父さんだと知られてしまえばぼくたちは誰ひとり助からないもの。だから父さんの首を斬るのが一番なんだ。」さっと剣を抜くと彼は父親の首をはねてしまいました。そしてその首を持ち去り、どこかの穴に投げ捨ててしまったのです。(p.58)

一見グロテスクにみえながら実におおらかで巧みな物語展開ゆえに人々を語りの喜悦に導くこの話型のなかでも、中世鎌倉時代の日本で編纂された大著『今昔物語』所収の話は昔話として傑出した出来を示している。にもかかわらず、不思議なことにこの話は日本では庶民一般に流布し愛好される民話とはならなかった。それは、『今昔物語』が当時未完で未刊の秘匿されたままの大著であったから、という特殊事情もあったかもしれない。加えて、この話が本朝篇すなわち日本の話ではなく、震旦篇すなわち中国篇に収められていたという事情も、いささか不利に働いたのかもしれない。しかし、そのような不利な条件があったとしても、口承の世界では面白い話はいくらでも流布しうるものである。それゆえ、この優れた話が我が国に浸透し定着しえなかったのは、日本人の感性のスクリーンが好悪の選別を行い、首首切断になじみにくさを感じてこの昔話を廃棄していったためではないか、と考えた方がむしろ理にかなう。

日本にももちろん斬首がらみの話はある。それどころか、『寺子屋』がそうであるように、現実の戦闘に劣らず、首実検は歌舞伎ではおなじみのものであり、また江戸の天下祭のひとつ神田明神祭礼の曳物「大江山凱旋」では、源頼光が退治した酒吞童子の首級をもって凱旋する(安藤優一郎『観光都市江戸の誕生』新潮新書122、新潮社、2005、p.43)。『日本霊異記』(9世紀頃)等にみられた「263 歌い骸骨」タイプの民話も広く流布している(稲田浩二『日本昔話通観 第28巻 昔話タイプインデックス』同朋舎、1988、pp.357-358。『同 第2巻 青森』1982、pp.345-346等)。囲炉裏に串刺しになっていた首がおやじの首にくっついて、そのおやじを翻弄する昔話「首さげ訪問」も、その「歌い骸骨」の一種の変奏である。非業の死をとげた者の首を埋葬する首塚、将門伝説等のような白馬に跨った首なし武者伝承(稲田浩二、大島建彦、川端豊彦、福田晃、三原幸久編『日本昔話事典』弘文堂、1977、pp.286-287、「首さげ訪問」・「くびづか 首塚」の項)、不気味なしゃれこうべの呪力を示す怪異の伝説や、復讐として次々と首

を刎ねる趣向をみせる江戸初期の絵師岩佐又兵衛による『山中常磐物語絵巻』等首を斬る残忍な話や絵もないではない(辻惟雄『岩佐又兵衛：浮世絵をつくった男の謎』文春新書629、文藝春秋社、2008、図35、pp.150-157、図42、p.175、図39、p.167。辻惟雄『綺想の系譜』ちくま学芸文庫、2004、p.16)。しかし、西洋伝来の復讐譚「歌い骸骨」をのぞけば、それらはいずれも明らかに処刑や首級としてであり、西洋等の話のように生首が何か積極的な意味をもつものとはいいがたく、また「歌い骸骨」の類話にしても、日本の場合必ずしも髑髏であるというわけではない。

対するにヨーロッパの民衆が育んだ民話やメルヘンとなると、生首や首斬りモチーフは積極的な意味を帯びて、それこそ頻繁に姿をみせる。例えば、先ほど言及した松原秀一の著書にも「五度殺される話」という章で論じられている、AaTh1537「五度殺された死体」に分類される話型は、胴体にくっつけた死体の生首がころんと転げ落ちるたびに、自分が殺してしまったと思いこんで、当事者たちが次々とパニックを起こすという抱腹絶倒の喜劇的な話である。西洋では非常に人気が高く、また広範な流布をみせる。もちろん首斬りといっても、メルヘンないしは笑い話であるため、たとえ内容は残酷であっても生々しさや残酷さはまったくない。この話も、実は日本にも伝播しており、日本昔話の一つとして分類されているが(439「知恵あり殿」、『日本昔話通観 第28巻 昔話タイプ・インデックス』p.430。『同 第10巻 新潟』1988、pp.443-445)、ではその生首の落下モチーフが人気を勝ち得ているかとなると、それに対するこだわりの度合いは極度にうすい。肉体の存在を可能なかぎり消していく正面顔文化や顔かくしの日本と、顔をリアルに表現することをめざす横顔^{プロフィール}文化の西洋や中国・韓国との間に横たわる決定的な違いは、日本人の生首へのこだわりの薄さにある意味傍証するものかもしれない(村澤博人『顔の文化誌』講談社学術文庫、2007、pp.236-237、pp.264-276)。

だが、同じ日本の話といっても、アイヌの伝承となるとまた話は別である。アイヌの叙事詩いわゆるユーカラでは首斬り、特に女性に対するそれは、極めて重要な位置を占めている。なぜならば、アイヌの叙事詩は、男性が、その自分を養う「わが姉」と呼ばれる母的存在に対する一種の母殺しを韜晦的に語る典型的のパターンを見せているからである。母の支配から父権の支配への転換を、母殺しにより行うという、古代ギリシアのヘシオドスの『神統記』が描き出していたあの神話的光景を、それらはまざまざと現出させる。例えば「ノーオウー」というユーカラもそうで、主人公が魔女的醜女の首を斬り落とすと、その首無しの体が追いかけてくる。だが、自分をこれまで支配してきた母なる姉をその悪しき魔女として退治すると、今度は自分のいいなりになりうる妹を、主権をついに掌握した男子・父として入手するのである(『アイヌ叙事詩 ユーカラ』金田一京助採集並ニ訳、岩波文庫、1988、pp.90-101)。

イギリスの外交官 J. モーリアが18世紀末から19世紀初めのペルシア世界を舞台に描いた冒険小説『ハジババの冒険』(原著は1824年刊、東洋文庫 平凡社、1984) 第二巻には、「パンに焼かれた首の話」(pp.86-109)と題して、小説風に語られた AaTh1537「五度殺された死体」話

型のペルシア版（現イラン）類話伝承が挿入されているが、この話のアラブ世界での浸透を感じさせるかのような精彩に富む語り口をみせ、大変に面白い。ちなみに、悪漢小説（ピカレスク）風の手法で当時のイスラーム社会を活写したこの楽しい作品そのものにも、塩漬けにされたロシア兵等の敵の首級を勝利の証拠として山積みするといった、当時としては極めてリアルであったと思われる光景が、まるで当たり前の出来事のように繰り返し姿を見させている。首斬りに関する限り、ペルシャではメルヘンも現実もほとんど地続きであるかのような錯覚すらおぼえる。

ロシアの古謡にも生首の呪力は健在であり、その生首表現にはいささかの躊躇もない。『ロシア英雄物語：語り継がれた《フィリーナ》の勇士たち』（中村喜和編訳、平凡社ライブラリー、平凡社、1994）の「巡礼の旅に出るワシーリイ」は、空っぽの頭蓋骨を物語展開の節目とオチとにする話である（同、pp.166-185、18世紀のキルシャ・ダニーロフ著『ロシア古謡集』に拠る）。「ドゥナイ」（同、pp.188-208）にも生首の落ちたその場所から川が流れ出す呪的不思議が語られている（A. ギリフェルジグ著『オネガのフィリーナ』中のオロネツ県キジ島の話）。これは、ヨーロッパに流布する中世聖者伝説の典型的パターンでもある（池上俊一、pp.122-123）。

オネガ湖、白海といったロシア北部で広く語られているとされる英雄叙事詩フィリーナのひとつ「バビロと楽士たち」では、貴人の子バビロがソバーカ王の宮殿にやってくる。「宮殿の周りには鉄の柱があり、その柱の先に人間の首がある。三つ目の柱の先には人間の首がない。それはあんたの首を掛ける場所だ」と告げられる。ソバーカ王と若者バビロは、三弦の楽器の競演をし、バビロは、王の水の魔術を火で制して闘いに勝ち、王となる（小泉保『カレワラ神話と日本神話』、NHK ブックス855、日本放送出版協会、1999、pp.115-116）。

フィンランドの民族的叙事詩『カレワラ』においても、垣根と生首とのそうした組み合わせは直截的である。『カレワラ』の別伝「パイピョラの宴会旅行」（ボレニウス採録）で美男の冒険児レンミンカイネンは、火の鷲、蛇、首の柱という三つの難関に遭遇する。『古カレワラ』ではその第三の難関に次のような描写が加えられる（『カレワラ』には、一般に普及している『新カレワラ』の他『原カレワラ』『古カレワラ』の二つの版を加えて、計三つの版がある）。

岡には柱が百本ある（古　一七・二四九）	中庭には柱が千本
どの柱も首でいっぱい	一本首なしで残っている
お前がそこに掛けられるのさ	お前が柱のその先に
	（小泉保『カレワラ神話と日本神話』、p.110）

そして、パイピョラの主人アハティとの魔法の勝負が始まり、“頭”のコードの執拗で意味ありげな反復の末に、英雄レンミンカイネンは冥界の王者アハティの首をはねて勝利する。

レンミンカイネン一撃打ち込んだ	蕪の頭を切るように
すべての魚からえらを取るように	豚の肉を切るように
哀れな息子の首をはねた。	

(小泉保、p.113、『原カレワラ』に拠る箇所)

しかしながら、斬首や垣根での生首さらしが露骨に語られる西洋の代表的メルヘンは、謎を解けない求婚者たちを即斬首の刑に処してしまう冷酷な王女の話、すなわちトゥーランドット姫の型に属する一群の昔話である。トゥーランドットとは、直訳すればシルクロードの王国「トゥーラン」の娘（ドット：ドイツ語の Tochter、英語の daughter「娘」にあたる）というところだろうか。求婚する男たちを徒競争後に殺すギリシア神話におけるアタランテの話（ロバート・グレイヴス『ギリシア神話 上』高杉一郎訳、紀伊国屋書店、1987、pp.238-239）や、機織りが求婚者たちに対して蜘蛛の巣的な罠となって、最終的にはオデュッセウスの強弓による処刑へと陥れていくペネロペー（ホメロス『オデュッセイア』松平千秋訳、岩波文庫、1995）等、不気味な「白い女神」（グレイヴス）の系譜をひく古代的色合いの濃い物語である（John B. Vickery, *Robert Graves and the White Goddess*, University of Nebraska Press, 1972. ノースロップ・フライ『世俗の聖典：ロマンスの構造』中村健二、真野泰訳、法政大学出版局、1999、pp.73-74）。ギリシア神話に語られるピーサとエーリスの王オイノマーオスは、愛娘である王女ヒッポダメシアに求婚する若者たちを十一人あるいは十三人次々と戦車競争で負かしては首をはね、その殺された敗者たちの首が列をなして王宮の門の上に釘づけにされていた（グレイヴス『ギリシア神話 下』、1986、pp.20-22）。娘である王女への近親相姦的欲望から父王が求婚者たちに謎をかけ、首をはねてしまう導入をもつ中世13世紀のロマン『アポロニオの書』（『アレクサンドロスの書 アポロニオの書』橋本一郎訳注、大学書林、1992、p.96）や、12世紀末ペルシャにおける文字通りの語りの天才ニザーミー（1141-1209）の著したロマンス叙事詩『七王妃物語（ハフト・パイカル）』（1190年前後か）第28章における求婚と生首も、もちろんその系統である（黒柳恒男訳、東洋文庫191、平凡社、1994、pp.157-174、特に pp.162-163）。このトゥーランドット系の類話のひとつであるロシア・コーカサス地方の昔話「キツネ話」の主人公は、ある老婆から絶世の美女である王女のことを教えられる。

九十九人の若者の命を奪った王女とは、この町の王女だよ。この人はね、結婚を申し込んだ若者を、三度どこかにかくれさせる。三度ともみつかってしまえば、その男は首をきられてしまう。一度でもみつからなければ、王女はその男と結婚することになっている。ただ、この王女は、世界中の塵一粒にいたるまでちゃんとみつけられる魔法の遠めがねをもっているから、けっして失敗しないそうだ。その美しさといったら、とても口なんかじゃいいつくせないがね（『アーサー・ランサムのロシア昔話』フェイス・ジャックス絵、神宮

輝夫訳、白水社、1989、p.85)

その話を聞いて勇躍、求婚にでかけた若者に、残忍な王女は次のように告げる。

わたしの庭をかこむ垣根は、あとすこしでできあがります。九十九本の杭には、わたしに結婚を申し込んだ人たちの首がのっています。でも、百本目の杭はまだあいています。あなたの首ならびったりでしょうよ。では、きょうは、ゆくりと旅のつかれをとって、あす、かくれてみなさい（同、p.86、下線は高橋）

髑髏をずらり並べて誇示するこの光景は、いわゆる人食い人種の髑髏の館や、人頭（生首）がひしめくキリスト教の壮麗なロマネスク聖堂とほとんど変わるところがない。「彼はまずグンヴァーラの求婚者を全部宴会の名目であつめ、それから王女のいつもいる部屋のまわりを、求婚者から切り取った首でとりまき、見るも恐ろしい光景をほかの者たちに見せた」と語られる、12、13世紀頃の史書『デンマーク人の事績』（谷口幸男訳、東海大学出版会、1993年）第五の書の1（p.169）において、淫乱邪悪な男クレープが王女グンヴァーラに対して行った陰湿な復讐もまた、この伝承の変種タイプである。つまり、このトゥーランドット系統の話は、ヨーロッパでも古い起源と広がりをも有するメルヘンのひとつ（AaTh851, AaTh851A）といわれるもので、グリム童話においてKHM191「あめふらし」と題して納められているメルヘンも、その類話の一つである⁵。非常に古い起源をも有すると想定される宝物庫の話（『七賢人物語』）と、このトゥーランドット系統の話の2つの例からみてもわかるように、口承の説話では、首斬りモチーフはほとんど世界的、普遍的でさえあって、少しも珍しいものではないのである。

5 グリム童話 KHM47「ねずの木」の斬首反復

20世紀ドイツ民俗学の金字塔『ドイツ俗信事典』で「首無し kopflos」の項を覗いてみても、民衆の間で採集されたうんざりするほどの数の俗信例が列挙され、ドイツにおける生首への畏怖と愛着ぶりがよくわかる（Handwörterbuch des deutschen Aberglaubens, Band 5, hrsg. v. Hanns Bächtold-Stäubli, Walter de Gruyter, 1987, S. 215-230）。上記のKHM191「あめふらし」ととどまらず、口承の話を基本にして収集されたグリム童話集には、西洋における昔話集のひとつとして当然のこと、断頭・斬首モチーフがそれこそ頻出する。KHM92「黄金の山の王」の結末では、これみよがしに断頭モチーフが反復される。KHM126「実意あるフェレナントと不実なフェレナント」では、首がすげかえられる。すでに触れたKHM60「二人兄弟」でも、主人公の男の子とドラゴンの双方の首が刎ねられ、話の最後にも人を石にしてしまう生首メドゥーサを暗示する魔女のエピソードが加えられており、グリム版「二人兄弟」においても生

首モチーフの反復は顕著にあらわれている。

ドイツ・ロマン派の画家ルンゲが、北ドイツの故郷ポメルン地方から採話し手を加えたと思われる、方言そのままの KHM47「ねずの木 Van den Machandelboom」では、男の子の首が継母によって断頭される。

「いっしょにおいで」と言って、箱のふたをあけました。「りんごをひとつ自分でとりな」。小さい男の子が箱のなかへかみがみこむと、悪魔が知恵^{ちえ}をつけました。ばたん、とふたをしめたので、男の子の首はちゃんと切れて、赤いりんごのあいだへ落ちました。すると奥さんは急にこわくなり、

「なんとか、わたしのせいでないようにしなくちゃ」と考えました。そこで上にある自分の部屋へ行き、たんすのいちばん上の引き出しから白い布をとりだしました。さて首を胴^{どう}のうえに置いて、布を首に巻きつけてしげると、見た目にはわからなくなりました。そこで男の子を戸口の外のいすに座らせ、手にりんごを持たせました。〔「びやくしんの木の話」、『完訳グリム童話集2』野村^{ひろし} 滋 訳、ちくま文庫、2006、pp.300-301、下線は高橋、以下同様）

だが、その本来なら一度きりのはずの断頭は、先の笑い話「五度死ぬ話」と同じ趣向で、しかし、こちらは不気味に、継母の悪意にそそのかされた、兄を愛する妹によって、意に反しもう一度反復される。

「兄さん、あたしにりんごをちょうだい」。けれども兄は、うんともすんとも言いませんでした。そこでマルレーネちゃんが兄の顔をびしゃんとぶちました。すると首がころがり落ちました。(同、pp.301-302)

つまり生首が転げ落ちる場面が二度も繰り返されているのである。それだけではない。この生首切断コードは、その後も巧みに変奏されながら、この不気味ではあるが実に土俗的なリアリティに満ちたすばらしいメルヘンの中に反復される。例えば、継母に殺された男の子は鳥に変身し、円形の金のネックレス（「この金のくさりをやるよ」同、p.308）や円形の石臼を首に掛ける。

その鳥はとてもきれいな赤と緑の羽をもち、首のまわりは純金のようにかがやいていて、目が星のように顔のなかできらめいていました。(同、p.310)

さて鳥は首を穴に通し、石うすを服のえり（カラー）のように首にはめて、木のうえへも

どると、歌いました。(同、p.316)

メルヘンの後半にはいると、歌により円形の武器を入手した小鳥(兄)は、意地悪な継母とそれに従順にしたがう父に対する復讐を、首斬りには首斬りでという因果応報の形で遂行する。

そう歌ったかと思うと、鳥は金のくさを落としました。くさは夫の首にびったりはまって、とてもよく似あいました。そこで夫は家のなかへ入って、言いました。

「ご覧、あれはなんていい鳥だ。わたしに美しい金のくさをくれた。それに、すばらしくきれいな鳥だ」。ところが、奥さんはすっかりこわくなって、がっくり床にくずおれ、ずきが頭から落ちました。(同、p.321)

西洋の象徴体系(高橋)において、金色は時に深紅と相同的で互換性をもつが、今この時も、金の鎖が巻かれた父親の首は、「首のまわりは純金で輝いてい」(p.310)た小鳥同様に、一筋血の深紅に染まっている。一刀のもとに首が切断されている断頭図だからである。継母にも斬首の刑が襲いかかる。ずきすなわち頭に被るものは、「鷺鳥番のむすめ」での転がり落ちる帽子のように、頭に似ているという意味で隠喩的に、また頭部に関わるものという意味で換喩的に頭部の代替的象徴となることがある。フレイザーは『金枝篇(三)』第47章「リテュエルセス」四において、19世紀前半の記録に基づき、イギリス・デヴォンシャー地方の刈り手たちの「首の叫び声」儀礼をオシリス儀式や穀物霊との関係で報告しているが、その儀礼での帽子は明らかに、刎ねられる生首と隠喩的かつ換喩的に同一化されている。帽子と斬首との等号的関係が民俗的思惟においても裏打ちされうることを確認する意味で、やや長めではあるが、その部分を引用してみよう。

—「小麦がすっかり刈り取られた後で、デヴォンの北の方の大概の農場では、収穫の人々が『首の叫び声』の祭儀を行なう。その地方の農場でこの慣習の省略されることは極めてまれであると私は信じている。それは次のようにして行なわれるものである。その季節(働き人たちが最後の麦畑を刈っている時)になると、儀式をよく心得た老人または誰か他の者が刈束堆を見てこれぞと思う一番見事な穂の小束を取り上げる。そしてこの小束を小綺麗に結び上げ、藁をまことに風雅に編みととのえる。これが小麦または小麦の穂の「首」と呼ばれるものである。畑がすっかり刈り取られ、水差がもう一度まわされると、刈り手たち結わえ手たち女たちは輪になって立ち並ぶ。この時「首」を持った人物が、それを両手に捧げて真中に立つのである。まず初めに彼が身をかがめてそれを地面の近くに支え持つと、輪になっている人々は一斉に帽子をとり、同じように身をかがめてそれを地面の近くに支え持つ。それから一同は、長く引いた調子のある声で一斉に「首」と叫び、同時に

ゆっくりと体を起こして、帽子を持った手を頭上高く挙げる。これが三度くり返される。次に彼らは「ウィー・エン」「ウエイ・エン」と叫び声を変え、前と同じような長く引いた遅い調子で、奇妙な調子と効果をもって三度叫ぶのである。(…中略…) こうして「首」を三度繰り返す、「ウィー・エン」あるいは「ウエイ・エン」を三度繰り返したかと思うと、一斉に高いうれし気な笑い声をあげ、帽子やコップを空へ抛り上げ、そこらあたりを跳ねまわり、そしておそらく娘たちに接吻をする。(…)」(『金枝篇(三)』、岩波文庫、pp.235-236、下線は高橋)

イギリスの他の地方では、その時「首を一つ取った」という。「何をもらった」「首だ、首だ、首だ」(同 p.237) と叫ぶ。つまり「穀物霊は束が刈られるとき頭を刎ねられるのである。」(同 p.238) そしてその時、放り上げられる帽子には、当然のこと首観念がのりうつっている。

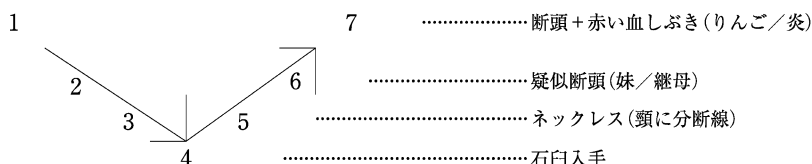
帽子を生首に重ねる伝統は、例えばイギリスを代表する小説家ディッケンズの最初の長編小説『ピクウィック・クラブ』(1836)であれば、前半部分で転げ落ちるピクウィック氏の帽子と、後半末尾近くに挿入された宇宙的荒々しさを表出する傑作挿話「旅商人の叔父の話」における剣先に刺された帽子が、対なす形で象徴的に現れる(北川悌二訳、三笠書房、1971、第4章 pp.57-58、第49章 pp.664-665)。その斬首象徴のシンメトリーは現代でも同様である。プラハの春後チェコからフランスに亡命した現代作家ミラン・クンデラの『笑いと忘却の書』(1979、1985)においても、冒頭の落とされた帽子と末尾の墓穴に転がり落ちる帽子とが、対なす生首図像として意味深く描きこまれる(ミラン・クンデラ『笑いと忘却の書』西永良成訳、集英社、1992、pp.6-7、pp.307-309。『生は彼方に』西永良成、ハヤカワ epi 文庫、早川書房、2001、pp.61-62、第一部の7。尚、その7から9は処刑表現オンパレードの節となっている。Cf. 第五部11、p.452)。斬首の象徴的表現は、つまり現在でもまさに生きているアクチュアルな思惟法なのである。日本では森鷗外と夏目漱石がその双璧である(高橋吉文「炎上する鷗外」、『言語文化部紀要』第22号、北海道大学、1992、pp.77-119)。漱石晩年の自伝的小説『道草』冒頭の奇妙な表現「帽子を被らない男」(新潮文庫、2006、p.7)は、見た目の自然主義的相貌とは異なり、そのような神話的思惟の圏域から不気味に発想されている一文である。『夢十夜』第十夜で脱がれる「パナマ帽」(新潮文庫、p.61)もずばり同じく斬首された生首である。

帽子が落ちるということは、即斬首を意味しているのである。話をグリム童話「鷲鳥番のむすめ」にもどせば、継母がみせる狼狽ぶりも、ずばりそれである。継母への斬首執行は、帽子落下をその前庭や露払いとして、最終的には次の場面において完遂される。

奥さんが戸口から出たとき、ドスン、と鳥が頭へ石うすを投げつけました。それで奥さんはぺちゃんこにつぶされました。(野村訳、pp.323-324、下線は高橋)

憎き継母の首に丸い石うすを投げ落とす。このメルヘンに添えられる挿絵は、民話と採話者
 ルンゲ、そして編纂者グリム兄弟たちの意を正しくくんで、まさにそのような斬首光景として
 この最後の場面を描きだしている (Moritz von Schwind 画。Kinder- und Hausmärchen
 gesammelt durch die Brüder Grimm, Winkler, 1983, S. 272. さらに野村^{ひろし} 訳『完訳グリム童
 話集 2』ちくま文庫、p.324にも)。このように見ていくと、この短いメルヘンのうちには、首切
 断のイメージやコード (記号) が何と 7 度も反復されていることになる。一覧にしてみよう。

1. 男の子、リンゴ箱で継母に断頭され、生首は真っ赤なリンゴ (赤い血) の中に落ちる。
2. 妹に打たれて、生首は落ちる。
3. 鳥が円いネックレスを首にかける。
4. 鳥が円い石臼を首にかける。
5. 鳥が、空から黄金のネックレスを落とすと、父親の首にはまる。
6. 継母の頭から、帽子が落ちる。
7. 鳥が、空から円い石臼を継母の頭に投げ落とす。赤い炎 (赤い血) があがる。



首にかける石臼と黄金のネックレスは、[穴のある円形のもの + 首・頭部 = 生首切断] という組み合わせと等式とを秘め、それが父と母に繰り返されている。このグロテスクなメルヘンは、つまり断頭というライトモチーフ (主導動機) の巧みな反復と変奏が際だつ、いわば斬首コードによって紡がれている物語なのである。付記するならば、興味深いことに、列挙した 7 度の反復例における 1 と 7 は断頭 (箱の蓋 / 石臼) と赤 (りんご / 炎)、2 と 6 は妹と継母による疑似断頭 (妹 / 継母)、そして 3 と 5 はネックレスによる赤く金色にきらめく斬首 (小鳥 / 父) という形で対称的に対応している。石臼入手の 4 は、その折り返し地点すなわち V 字形なす扇の下弦すなわち要にあたる部分となって、メルヘン全体で V 字状のプロセスを示している。

だが、この「ねずの木」での断頭反復にしても、上にあげた一覧表の 1 と 2 であれば確かに首斬りである、とは聞き手や読者にもわかるものの、それ以外の 3 - 7 の場合は、いずれも隠された表現となっていて、ほとんど気づくことさえない。グリム童話には、このように、見かけからいくと少しもそのようには見えないが、しかしその実斬首モチーフやコードが執拗に反復されている、といったメルヘンが非常に多い。人気抜群の KHM53「白雪姫」もそのひとつで、実際には生首メドゥーサを秘かに主題とするメルヘンとしてグリムたちによって加筆・深化され、読み替えられていったものであった (高橋吉文『グリム童話 冥府への旅』白水社、1996、

第一章参照)。KHM6「忠臣ヨハネス」、陽気な KHM83「幸福のハンス」等も、断頭コード（記号）が反復される優れたメルヘンや笑い話である。可視であれ不可視であれ、西洋の文化や昔話においては、そして、もちろんグリム童話集（KHM）においては、生首や断頭の図像はほとんど自明化しているともいえて、このメルヘン集のいたるところに秘かに、そして揺るぎなく敷設されているのである。

6 KHM89「鷺鳥番のむすめ」と古代ゲルマン人の馬頭信仰

グリム兄弟が失われしゲルマン文化の栄光を求めて古代研究やメルヘン等の収集に専念した19世紀初頭（1810年代）、アルプス以南の地中海由来のロマンス語と都市の文明（当時のその継承者と文化的覇者はフランスである）に対して、アルプス以北を占める北方のゲルマン民族による森と野生の文化こそが愛国主義から称揚されんとしていた。その時にゲルマン的性格をいかにも濃厚にたたえた代表的なメルヘンとして、KHM89「鷺鳥番のむすめ Die Gänsemagd」が浮上してくる。例えば、この KHM89 についてグリムたちは、中世フランスの「大足のベルト」伝説とのつながりを指摘しつつも、ゲルマン濃度の違いからか「鷺鳥番のむすめ」の方を「はるかに古代風で、はるかに美しい」として絶賛している（レレケ編『グリム童話集』第三巻、レクラム文庫、S.170）⁶。これは、必ずしもグリムたちだけのドイツびいき的評価というわけでもなさそうで、現代のヴァルター・シュルフ著の定評ある『魔法昔話事典』（Walter Scherf, Lexikon der Zaubermärchen, Alfred Kröner, 1982）でも、このメルヘンが「グリムの全童話集の中でも最も美しく最も豊かな話のひとつ」（S. 146）で、「中世においてすでに重要な役割をはたしていたにちがいない」（S. 149）ことが指摘されている。もっとも、その定説に対しては、グリム研究の第一人者であるハインツ・レレケ教授のように、懺悔の導入等キリスト教的歪曲がなされた人工的な話として否定的に見る立場もあるが（Heinz Rölleke, “Ripeness is all” — Reifung und Wandlung der “Kinder- und Hausmärchen” der Brüder Grimm. In: Märchen-spiegel, Mai 2004, hrsg. v. der Märchen-Stiftung Walter-Kahn, Schneider Verlag, 2004, S. 7）、呪文や馬頭、ストーブの中での告白等古代ゲルマン的遺風を深く刻んでおり、キリスト教の変質にもかかわらず、このメルヘンのたたえる古代的な風格は揺るがない。

KHM89「鷺鳥番のむすめ」は、フランス系のユグノー出身で旅籠屋の娘であったドロテア・フィーマン夫人からヤーコプ・グリムが直接採話したものとされている。つまりカッセル近郊の話で、初版第二巻（1815）から『子どもと家庭のための昔話集（＝グリム童話集）』に登場している。アールネとトンブソンの話型分類では、AaTh403「黒い嫁と白い嫁」の a と b、AaTh450「小さい兄妹」、AaTh533「物言う馬の頭」に分類される。特に「すり替えられた花嫁」型として類話が多く、中世13世紀に成立したと想定されているフランスの魅力あふれる「大足のベルト」伝説との類縁関係も、指摘されることが多いようである。ボルテとポリフカが著した『グ

リム童話集注解』（Olms 社）の詳細な類話データを見ると、このメルヘンはほぼ全ヨーロッパ的に流布している昔話であったことがよくわかる⁷。アジア、アフリカにも類話が存在する（「お姫さまと七人の兄弟」、山室静編著『新編世界むかし話集 9 アフリカ編』、現代教養文庫、社会思想社、昭和52、1977、pp.46-56）。とはいえ、フロイト派のブルーノ・ベッテルハイムによると、「かつては人気があったが、今日ではあまり知られていない。」（『昔話の魔力』波多野完治・乾侑子美子共訳、評論社、1978、p.186）とも指摘されている。「物言う馬」型に「属する話は多数は採取されていない。これに関するリウングマンの研究はヨーロッパの一四話と北アフリカの一話を資料とし、その他は筋は似ているがこの型の特徴になっている部分を欠いたアフリカの類話数例を引いている。この話の起源と伝播に関するリウングマンの結論によると、これはダニューブ川上流地方で形成されたが、その後の伝播過程においては、ドイツの話が大きな影響を与えたということである。」（S・トンプソン『民間説話：理論と展開（上）』荒木博之、石原総代訳、現代教養文庫930、社会思想社、昭和52年、1977、p.104）。

「ねずの木」が北ドイツ的な土俗性と迫真性を帯びていたとすれば、この「鷺鳥番のむすめ」の方は、古ドイツ的、極めてゲルマン的な特徴を色濃く帯びたメルヘンのひとつだといわれている。その理由のひとつは、血や言葉による呪力、誓言への信仰、ストーブの中での代替告白といった、実際に古代ゲルマン人たちの間に確認されている非常に古い風習や要素とともに、馬の生首のみが市門の壁に掲げられているからでもある。それは、どこか不思議な、しかしまたなぜかとてもリアルに感じられる場面である。コンラート少年（クルトくん、下の金田訳では、キュルドこぞう）が王女の奇怪な挙動を老王に訴える。

そこでキュルドこぞうは、

「毎朝、ふたりで鷺鳥をつれてあのまっくらな御門を通りぬけるのでございますが、あすこの壁に馬の首が一つくっついておりまして、その首に、むすめさんが、

「ファラダや、おまえ、そこにいるのねえ」

と話しかけますと、馬の首は、

「およめいらずのおきさきさまのおとおりですね、

これがおかあさまに知れたなら、

おかあさまの心の臓は、さだめし破裂することござんしょう」

と返事をいたします」と言って、それから、がちょうを遊ばせる草原へ行ってからのこと、風に吹き飛ばされる帽子を追いかけていなければならないこと、そんなことを王さまにお話しました。

（『グリム童話集（三）』金田鬼一訳、岩波文庫、1984、pp.100-101）

王女の殺された愛馬ファラダの生首が壁に掛けられている、という設定からしてまずもって奇

怪だが、それが王女さまに毎朝話しかけるという設定にも、魔法でも何でもありの昔話すなわちメルヘンにしても、やはりどこか不可思議な趣とリアリティを感じさせずにはいない。それは、馬の首を斬って掲げるという風習が、必ずしも突飛で非現実的な着想、つまりたんにメルヘンの空想の産物ではなく、古代のゲルマン人たちにとっては一般的な、つまり実際に存在していた極めてリアルな風習でこそあったからなのである。

ゲルマン人というのは、もともと中央アジアに居住していたアーリア系の騎馬民族の一派で、寒冷化のために現在のロシアか黒海周辺から、放牧している羊や馬等の草を求めて西や南にと移動を開始する（鈴木秀夫『気候の変化が言葉をかえた：言語年代学によるアプローチ』NHKブックス、日本放送出版協会、平成2年、p.107、pp.121-123）。紀元前数千年前のことである。そのアーリア系の民族は、当時最大の武器であった馬を擁していた。巨躯の馬の馴致は、太古の時代、軍事上まさに画期的な最先端技術で、巨大な力と速度を有する大型の馬を駆使することのできた騎馬民族は、圧倒的な軍事力を誇ってインドやギリシア等各地域を制圧、先住民族を支配する支配階級として君臨することになる（木村凌二著『馬の文化史』、講談社現代新書、2001年、p.39）。イランやトルコ、そしてイタリア等のヨーロッパ全域に侵入した、いわゆるインド・ヨーロッパ語族である（風間喜代三『言語学の誕生—比較言語学小史—』岩波新書、1990年。風間喜代三『印欧語の故郷を探る』岩波新書、1993、pp.190-192、184-198。さらに pp.133-134 には馬への言及がある）。北欧やドイツ圏等に侵入してきたゲルマン民族も、もちろんその語族の一派である。

紀元1世紀古代ローマの歴史家タキトゥスの著した『ゲルマニア』（田中秀央、泉井久之助訳、岩波文庫、昭和41、1966）には、古代ゲルマン人と馬との関係についてこう記されている。

なほこの種族（ゲルマン人）に特有のものとして馬の予覚警告を求める方法がある。さきに述べたかの神聖な森や林にはかかる真白な、いまだ人間の用には穢されざる馬が、公の手によつて養われてゐる。これを聖車に繋ぎ、その国の司祭が、王または首領とともに随伴し、その嘶きと鼻嵐とを伺ふ。ただに人民の間のみならず貴族の間においても、これ程に信仰せられる占ひはない。何となれば、司祭の間にあつてはみずからは偏に神の僕たるのみなるに、馬は神（意）の熟知者であると、考えられてゐるからである。（第一部十〔神意の推知〕、p.48、下線及び最初の括弧内の補足は高橋）

同じタキトゥスが著した『年代記（上）』（国原吉之助訳、岩波文庫、1982）中の、ローマ軍の将軍ウォルスがゲルマン人の指導者アルミーニウスに惨敗した戦場を軍人カエキナがその6年後に行くくだりには、こう報告されている。「草原の中央には白骨が、退却したあたりに散らばったり、盛り返したあたりに積み重なっていた。そばには武器の破片や馬の四肢が放り出され、木の幹にも髑髏がくくりつけてあった。周囲の森の中には、あちこちに蛮族の祭壇が見ら

れた。」(タキトゥス、第1巻の61、p.73)この木の幹にくくりつけられた髑髏とは、ローマ兵士の頭蓋なのか、それともローマ軍の馬の頭蓋骨のことなのか。グリム兄弟の兄ヤーコプ・グリムは、その怪物的な大著『ドイツ神話学』(1835)「第三章 礼拝 Gottesdienst」の中で、その箇所を次のように解説している。

カエキナがヴァルスの敗れた戦場に近づいて、木々の幹に馬の首がくくりつけてあるのを見たのだとすれば、これらはローマ軍の馬で、ドイツ人たちが戦場でそれらを奪いとり、自分たちの神々への捧げものにしていたものである。(Jacob Grimm, Deutsche Mythologie, 1. Band, Ullstein Materialien, Ullstein Buch Nr. 35107, Ullstein, 1981, S. 38、下線すなわち強調はグリム自身による)

デンマークの偉大な歴史家サクソ・グラマティクス(1150頃-1220)が12、13世紀頃に著した史書『デンマーク人の事績』(谷口幸雄訳、東海大学出版会、1993年)は、今は小国にすぎないデンマークがかつてはイギリスをも制覇しえた国力の絶頂期である中世後期に、その国力にふさわしい卓越した歴史家が、自国のすなわちゲルマン人たちの歴史を、物語として豊かに語っているものである。日本でいえば鎌倉幕府の頃の史書である。幸い谷口幸男によってすでに日本語にも訳されているこの中世後期の著作は、シェイクスピアの名高い悲劇『ハムレット』の素材にもなった王子アムレットの冒険の物語をはじめとして、その内容は波瀾万丈、まことに魅力に尽きないが、その第5の書の3には、ゲルマン民族にとって馬が有していた神秘性を証する次のような場面が語られている。勇士エーリクの前進を、邪悪な敵グレーブが馬の首の呪力でもって阻もうとするとところを引用してみよう。

これ(魔法)が許可されると、彼(グレーブ)は魔法使いのえり抜きの一団を引きつれて、ふたたび海岸に行く用意をした。こうして彼はまず神々へ生贄に、馬の首を切りとって棒の上に刺し、下に棒をあてがって馬の口を大きく開け、エーリクの企てをこの恐ろしいみもので台なしにしようと望んだ。というのも、未開人の愚かな心は、彼らの前に示された恐ろしい首をみて逃げ出さだろうと思ったからだ。エーリクはすでに彼らの方に向かって歩いていた。遠くの方から馬の首に気がつくと、よからぬ企みがあることをさと、仲間の者たちに沈黙をまもり、用心深く行動するように命じ、また不用意な言葉で魔法にきっかけをあたえないよう、むやみに言葉を発せず、もしも話す必要があるときは、みなにかわって自分が話す、とつけくわえた。こうして両者が川の流れを間にはさんだところまできたとき、魔法使いたちはエーリクを橋から追い払うために馬の首をつけた棒を川のすぐそばにつつ立てた。しかし彼はいささかも恐れずに、橋まで進んで呼ばわった。

「それをかついでおる者に、その悪運がくだれ。われわれには幸運が見舞うように。悪を

なす者に悪がふりかけ。災いの荷をかつぐ者を荷がおしつぶせ。われわれにはよりよき前兆が安全をもたらすように」

彼の望んだとおりのことが起こった。というのも、すぐに馬の首は下におち、棒は倒れて、運んでいた者をおしつぶしたからである。(『デンマーク人の事績』、pp.178-179、括弧内の補足や下線は高橋)

その訳者谷口幸男による訳注には、こうある。

(一) 棒の先に馬の頭または頭蓋骨をつけて立てるのは、敵を威嚇する方法であった。オラウス・マグヌスの『北方民族誌』にも見える。『エギルのサガ』五七に、ノルウェーの血斧のエーリク王に対してエギルが、このような棒（ニーズストング）を立てて王の国外追放を土地神に祈るところがある。効果があったかどうか、エーリク王はエギルの望んだ通りノルウェーから追放になる。(同書、p.429)

その3世紀後のオラウス・マグヌスの『北方民族文化誌 上巻』（谷口幸男訳、溪水社、1991）第三卷第八章「雷鳴についてのイエートランド人の迷信」にも、馬の供儀について次のように書かれている。

またイエートランド人は出陣するとき、祭壇に馬を供えるのが常であった。馬の頭を切りとり、それを棒の先につけ、口を大きく開かせて軍勢の先頭にかかえて運んだ。しかし、彼らの戦いの前だけでなく、敵を撃ち破った後にも生贄の獣を捧げた。そして神々の名譽のために華やかな舞戲をもよおし、その際、娼童のたおやかな舞踊、舞台の役者への喝采、鈴や銅のシンバルのやわらかい音を楽しんだ。彼らがこれら特別の生贄を捧げたのは、主として戦いにおいて神の加護により敵の力に負かされることがないようにという配慮からである。(オラウス・マグヌス、上巻、p.186-187、下線は高橋)

ゲルマン圏にみられる馬や馬頭への信仰の広がりや深さは、グリムの先鞭を踏襲し1935年に完成された10巻本の『ドイツ俗信事典』第6巻（ベヒトルト＝シュトイプリ編、ヴァルター・デ・グロイター社、1987）「馬 Pferd」、「馬頭 Pferdekopf」の項目からも歴然であるが、「馬の供儀 Pferdopfer」（S. 1671）によれば、結局は、ゲルマン神話の主神であるヴォーダン（オーディン）とその神獣である八本足の馬との緊密な繋がりに帰因するところが大である、とされている。

そうした馬の生首への信仰と呪力は、近代の民衆の民俗的風習の中にも根強く生き続けていった。エーリヒとバイトゥル共著の『ドイツ民俗学事典』（クレーナー文庫）には、次のよう

に記されている。

「危険を最初に察知するのは、馬」といういいまわしが今日でも流布するように、ゲルマン人たちの間では、馬は予言能力のある動物とされていた。ことに死者を悼む儀礼や埋葬の儀礼では、人々は、遺体をのせた車を牽く馬のふるまいから多くの予言を読みとったりする。馬はまた、ゲルマン人たちの生贄のための獣でもあった。(…中略…) 比較的最近まで馬の頭を用いて魔法が行われていた。日に晒して白くした馬の鬐^{はふ}を破風(切妻)に飾ると(破風飾りという)、稲妻や雷雨を防ぐことができたのである。(Wörterbuch der deutschen Volkskunde, begründet v. Oswald A. Erich und Richard Beitzl, Dritte Auflage, neu bearbeitet v. Richard Beitzl, Kröners Taschenausgabe 127, Alfred Kröner, 1974, S. 641、「馬 Pferd」の項。括弧内の補足、下線は高橋)

この破風の端に馬の頭蓋骨を飾る風習は、北のザクセン地方に多いといわれている。さらに馬の予言性に関しても、ハンス・ビーダーマンの『図説 世界シンボル事典』(八坂書房、2000年)には次のように書かれている。

馬は、シンボルとしては、牛よりもさらに高次の力強さや活力を体現する。(…中略…) 馬は不気味な獣としてしばしば死者の国と結びつけられ(たとえば馬に乗って空中を疾駆する「幽鬼の軍勢 Wildes Heer」など)、死者に供える生贄ともなったが、後にはその駿足ぶりや跳躍力から太陽のシンボルとなる。(…中略…) 馬の頭蓋骨を家の切妻壁につけるのは、災難除けのためであった。ゲルマン人たちの間には、馬を生贄としてささげたのち、その肉を食べる風習があったが、キリスト教化されてからはこれはタブーとなり、今日でも「良俗に反する」行為とされている。(ビーダーマン、pp.54-55)

ディッテ・バンディーニ、ジョヴァンニ・バンディーニ著の『俗信小事典』(dtv 社、1998年)の「馬 Pferd」の項にも、その馬の神秘的な予言力についての説明がある。

人間が馬に畏れをもって対するのは、馬が霊たちの世界と深い繋がりをもっているに違いないという確信のゆえであった。そのため、馬には未来を予見する能力もある、と考えられていた。ここから、馬の一挙手一投足やその嘶きや鳴き声のひとつひとつに未来の兆候を読みとろうとした。(Ditte und Giovanni Bandini, Kleines Lexikon des Aberglaubens, dtv, 1998, S. 209)

破風に飾る馬の頭蓋骨や、聖ヨハネスの火祭りで篝火の中に馬の首を投じる民間儀礼等につ

いても、ヤーコプ・グリムはその『ドイツ神話学』の中で言及している (Band 1, S. 514, 550)。そのほぼ100年後に完成された『ドイツ俗信事典』10巻本の「馬」や「馬頭」(S. 1664-1671)の項ともなると、かかる俗信や馬頭信仰例はそれこそ膨大、まさにめくらまんばかりに記録、報告されている。

ところで、話の襞のひとつひとつに古代的な彫りの深さと堂々たる威風を感じさせる名品とでもいうべきこのメルヘン KHM89「鷺鳥番のむすめ」には、グリムたち自身による詳細な注解がある。稀代のゲルマン学の学者たちであったグリム兄弟は、1815年に『グリム童話集』初版の第二巻とともに、ヤーコプ・グリムが各メルヘンに詳しい注解を付した注釈集が刊行され、1822年にはその第二版が、そして1856年にはグリム童話集第六版の第三巻として、ヴィルヘルム・グリムによる注釈集の第三版改・補足版が出されている。それはいかにも学者らしく、本文としては一義的に提示されたかにみえる各メルヘンの由来や類話等を記し、一見固定的にみえるメルヘンがいかにも多様な連関の中におかれているかを可視化し、内容を補足したり相対化する作業がなされている。当初はこの注釈の方が重視されていたといってもよいかもしれない。しかしながら、この学術的注解の付帯が、グリム童話集そのものの売れ行きにブレーキとなっていることを認識した二人は、グリム童話集の第二版以降、約30年以上の間この注解集の改訂と併刊を控えることになる。だが、学問的なアプローチを放棄していたわけではないことは、第六版において注釈集を改訂し刊行しようとしたそのこだわりからも見てとることができる。この KHM89「鷺鳥番のむすめ」にも、グリムたち自身による詳しい注釈が書かれている。各メルヘンにグリムたちがどのように多彩な連関を感受していたのか、そこに注目して読むと、なかなか興味深い。一例として生首に関わる箇所を一部訳出してみよう。ちなみに、*¹⁾と表記されたものは、高橋による訳注である。

ツヴェールン地方の話*¹⁾。この美しいメルヘンは、侍女の姿においても毅然としている王女の姿を、シンプルな筆致で、そしてそれだけによりいっそう深々と示しているものである。母親が彼女にお守りとして与えたものを(血の滴が言葉を語る例は、ほかにもある。Nr.56「恋人ローラント」。クレメンス・ブレンターノの韻文の歴史劇『プラハの創設』1815、106頁と注釈45も参照のこと)*²⁾王女はついうっかりなくしたうえに、立場がすりかわったことを決して口外してはならないことをむりやり誓言させられ、どん底に突き落とされる。けれども、風を操る呪文は依然忘れず、また毎朝暗い門をくぐる時の、これまた死んだ後も王女に忠実な馬との対話によって、昂然たる気持ちを失わない。

話をする賢い馬の例は、ほかにも見いだすことができる (Nr.126「忠実なフェレナントと不実なフェレナント」)。その切られた馬の首には、(北欧神話のミーマーの生首と同じく)死んだ後も言葉を話す力がそなわっている*³⁾。

タキトゥス (『ゲルマニア』第10章) にも、すでに引用がある。「なほこの種族 (ゲルマ

ン人) に特有のものとして馬の予覚警告を求める方法がある。」不思議なことに、古代の北歐人たちは、犠牲に捧げた馬たちの首を棹に刺す習慣があった。そうすることで敵に危害を加えることができると信じていたのである(サクソ・グラマティクス『デンマーク人の事績』第5章第75節。ブーム著『寓話の時代』第1巻、317頁参照)。ヴェンド人の間でも同じような習俗が一般的であった^{*4)}。馬の頭をいくつも掲げることによって疫病を防ごうとしたのである(ヨハネス・プレトリウス著『世界記述』1660、巻2、163頁)^{*5)}。人間の頭を垣根や棒杭に刺していた事実も有名である(ハウプト編の古代研究誌『ドイツ古代研究誌』第3号、51頁の注釈)^{*6)}。『エェル住民のサガ』219頁にもある^{*7)}。⁸

* 訳注1) ドイツ中央部にある都市カッセルの近郊。訳文中の Nr. は『子どもと家庭のための昔話集(グリム童話集)』(=KHM) 最終版第七版(1856)における配列番号を示している。

* 訳注2) クレメンス・ブレンターノはドイツ・ロマン派の詩人で劇作家。若いグリム兄弟たちに民謡や民話等の収集を要請する。ブレンターノの歴史劇は、チェコの神話的な女王リブッサを素材にしたもの。その神話そのものはスメタナの国民的歌劇『リブッサ』で有名。

* 訳注3) ミーマー Mimer とは、北欧ゲルマン神話の支配者であるアース神族の賢者中の賢者で、その敵にあたるヴァーン神族のもとへ使者として遣わされて殺され、その生首が主神オーディンのもとへ送り返される。だが、オーディンがその生首を呪文で甦らせると、ミーマーの生首は、彼にありとあらゆる秘密を預言するようになったという。ちなみに、このミーマーは三つある地下冥界の泉のひとつミーマーの泉の番人で、オーディンは片目とひきかえに叡智をもたらすその水の力を授けられたともいう。

* 訳注4) ヴェンド人とは、ドイツ北東部に居住する古い西スラブ系民族で、現在はソルブ人と呼ばれている。

* 訳注5) プレトリウスは17世紀バロック時代のドイツの著名な学者。

* 訳注6) モーリッツ・ハウプト(1808-1874)は、ベルリン大学でヤーコプ・グリムとも親交のあったドイツ古典文献学者。文献批判の方法を完成させ、上記の学術誌を創刊・主宰して、当時の古代ゲルマン研究を強力に牽引していた重要人物で、グリム兄弟の諸論考の注釈には、彼のこの研究誌(1841-1873)の名前が頻出する。

* 訳注7) 古典期アイスランドのサガのひとつである。

この短い引用からだけでも、グリムたちが生首を十分に意識していたことが垣間見えるので

はないかと思う。KHM89「鷺鳥番のむすめ」の背後には、ゲルマン人の古い風習と信仰が沈殿している。王女と、断頭された馬フラダの馬頭との間になされる対話には、その風習の残照が生々しく描かれているのである。だが、その風習にとどまらない。門壁に打ちつけられたその馬頭を生首の呈示ととることが可能だとすれば、このメルヘンのⅡ後半部では、この言葉を話す生首との対話の場面が都合三度も反復されていることになる。実は、この場面は、メルヘンのⅠ前半部の水辺での王女の姿勢の三度反復に対応しているものでもある。水を飲むために王女はかがみ、うつぶせになって頭を前に突き出す。すなわち斬首刑時の姿勢をとるのである（Cf.エミール・マール『キリストの聖なる伴侶たち』田辺保訳、みすず書房、1991、p.47）。とするならば、斬首姿勢の三度反復に、馬頭の三度反復というように、このメルヘンにおける生首の反復は無視しえない数となる。

さらに、クルトくんの帽子も三度ころころと転がりゆく。帽子もまた、頭部に載せるものとして頭部を換喩的にないしは提喩的に表現する機能をもつと解するならば、ここにも生首落下すなわち斬首の反復が三度あることになる。

この帽子と生首とのつながりは、例えばKHM111「上手な狩人」にも現れてくる。この知名度の低いメルヘンを構成上Ⅰ前半部とⅡ後半部に分節してみると、Ⅱ後半部において「三人の巨人の首斬り」が露骨に遂行されている。Ⅰ前半部にも「三人の巨人」は登場しているが、「帽子を落とす」にすぎない。だが、後半の「三人の巨人の首斬り」は、実は「三人の巨人」と「首斬り」という異なる二つのコードを結合してひとつにしたものである。

Ⅰ前半部：「三人の巨人」＋「帽子を落とす（＝首斬り）」

Ⅱ後半部：「三人の巨人の＋首斬り」

Ⅰ前半部の「帽子」を換喩的に生首として幻視するならば、「帽子を落とす」は生首の落下すなわち斬首そのものを表すものとなる。いいかえれば、Ⅰ前半部では「三人の巨人」＋「帽子を落とす（＝首斬り）」として韜晦的に二つに分断して布石を打たれていた行為、すなわち三人の巨人への断頭執行が、物語のハイライトをなすⅡ後半部になると、「三人の巨人の首斬り」として連結され、明確に顕在化してくる仕組みになっているのである。

シラーの戯曲『ヴィルヘルム・テル』（1804）において、槍の先に掲げられた悪代官ゲスラーの帽子が代官すなわち代官の首そのものを象徴していたように、帽子と生首とを図像的に等しいとする発想は、西洋では頻繁に見られるものである。その意味からいって、「灰かぶり」の木の枝に飛ばされた父親の帽子や、「鷺鳥番のむすめ」のつむじ風に弾き飛ばされて転がるクルトくんの帽子にも、つまり生首が象徴されていると考えることは十分に可能であり、また第1章「灰かぶり（シンデレラ）」の読解や、本章第2章中の『金枝篇』からの引用においても明確に示されていたように、帽子が生首を象徴することは、グリムだけのひどく突飛なアイデアでも、

また筆者の論外な恣意的読解でもないのである。

このメルヘン「鷺鳥番のむすめ」の最後にも、王女がストーブの中にかがんで入り、その高貴な出自や正体を一人告白する場面がある。これももちろん、前述の水辺での斬首姿勢の韜晦的な反復表現であることはすでに述べたとおりである。そして、ストーブの中でなされたその秘密の告白は、馬頭のように外へと突き出されていた煙突に聴き耳を立てていた老王によって盗み聴かれ、それによって鷺鳥番のむすめの正体は判明し、貶められていた王女の名誉が回復される。この昔話の前半で斬首されていたファラダの馬頭と王女の生首の甦りが、その90度に屈曲した煙突の曲がり（馬頭）に図像的に暗示されていたのである。もっとも、その煙突そのものは14世紀以降の発明であり、古代には存在しない（ヨハン・ベックマン『西洋事物起原Ⅱ』特許庁内技術史研究会訳、ダイヤモンド社、1981、pp.457-458）。したがって、この部分は明らかに後代による付加か変形に違いないが、そのような付加や変形は、しかし、生きた昔話伝承の常と考えるならば、それも、生首の喪失と回復というこのメルヘンが内包する内在論理が、後代により積極的に押し進められていった結果、と好意的に解することができる。このように、KHM89「鷺鳥番のむすめ」は、異常なまでに生首や斬首が反復されている特異なる魔法昔話なのである。しかしながら、グリム童話等におけるそうした斬首コードの存在や頻出は、上述したように、グリム兄弟による残酷嗜好の表現でも、筆者の現代的すぎる恣意的で遊戯的な記号の深読みでも決してなく、生首や頭蓋崇拜の重厚な歴史的事実をその幽暗な基底に秘めていることの自然な反照のゆえにほかならないのである。

7 頭蓋信仰の広がり

『ドイツ俗信事典』の膨大な俗信事例をさらに列挙するまでもなく、本論文に引用したいくつかの史料だけでも十分に想像されうるように、馬や馬頭は予言等の強い呪力を発揮しうる霊的な存在であり、その馬頭切断はかつてゲルマンの信仰や魔術と深く関わっていたものであった。馬頭供儀をも含む人頭崇拜や斬首は、西洋文化において強いリアリティを有していたのである。そのような呪術的思惟が歴史的に実在したと考えるならば、グリム童話やメルヘン一般の中に斬首コードが頻繁に現れてきても、私たちは何ら驚くにはあたらない。

古代ギリシアの歴史家ヘシオドスが、その『歴史 上』（松平千秋訳、岩波文庫、1988、pp. 342-345）において生き生きとした筆致で伝えるはるか古代のペルシア帝国における後継者争い、すなわち日の出とともに最初に馬が嘶いた者の方を王としたとするダレイオス王についての有名な逸話（巻3の84-88）も、直接的には馬が太陽神ミトラの聖獣であった神話的ビジョンに、そしてより根源的には、騎馬民族としての出自をもつ彼らの間にとだえることなく伝えられてきた、馬の神秘力や予言力に対する強い畏敬の念に由来するにちがいない。ペルシアの大古典『シャー・ナーメ（王書）』をもとにしたペルシャ15世紀の細密画には、馬頭等生首たちが実となっている不思議な樹木が描かれている。その馬頭の実のひとつが、遠征途中のアレクサ

ンダー大王に語りかけ、その死を予言する。この伝記や絵も、そうした馬を畏怖する霊的心性の圏域にあるものである（ロジャー・クック『イメージの博物誌15 生命の樹：中心のシンボリズム』平凡社、1990、第33図、p.77。但し、フェルドゥスィー『王書 古代ペルシャの神話・伝説』岡田恵美子訳、岩波文庫、1999、あるいは『王書 ペルシア英雄叙事詩』黒柳恒男訳、東洋文庫150、平凡社、1969には、その該当箇所の邦訳はない）。

栗原成郎著『ロシア民俗夜話：忘れられた古き神々を求めて』（丸善ライブラリー190、丸善株式会社、1996）にも、古ロシアの異教の豊穡神ヤリーロや馬の守護霊ヴァジロに関して次のような記述がなされている。

インド・ヨーロッパ諸民族の神話的表象において太陽はしばしば白馬の姿をとる。馬の頭もまた太陽のシンボルとされた。馬の頭は、仔馬が産まれるとき、まず最初に頭が外に出ることから、地平線・水平線のかなたから昇りはじめる朝日のシンボルとしてイメージされた。

民族学者エフィメンコによれば、昇る太陽、春の太陽のシンボルである馬の頭はまた、幸福の神、あらゆる災いの撃退者であるヤリーロのシンボルでもあった。これとの関連において考えられる民間伝承に、ベラルーシに行われていた非常に珍しい慣習がある。

ベラルーシの牧人たちの信仰によれば、馬には、馬の繁栄と疫病除けを司るヴァジロ（Vazilo）という特別の守護神がいる。ヴァジロは馬小屋に住み、また馬の放牧地にいる。その信仰に基づいて、牧人たちは野営の放牧地に巨大な竿を地面に突き刺して立て、そのてっぺんに馬の頭蓋骨を突っこんでおく。これはヴァジロ神の像である。（栗原、pp. 116-117）

このヤリーロやヴァジロへの信仰は、ケルトやゲルマン世界同様、スラブ世界の基層にも馬頭信仰が潜んでいることを示している。家畜史における権威 F. E. ゾイナー Zeuner の著作『家畜の歴史』（国文直一、木村伸義訳、叢書・ユニベルシタス、法政大学出版局、1983、但しドイツ名ならば本来ツォイナーが正しい）や、フレデリック・J・シムーンズ著『肉食タブーの世界史』には、かつてこのように神秘的な意味を強く帯びていた馬と人類の関わりが推論されている。それによると、印欧祖語が使用されていたと考えられるウクライナ地方で、野生の馬が狩られ食用にされていたのを家畜用として、つまり肉食用として育てるようになった、という。以下の引用中、記号*¹、*²と印を付したものは、高橋による訳注である。

乗馬の技術がしだいに改良され、二頭立ての戦車が発達するにつれて、遊牧騎馬民族は、その大きな機動力をもって、稀にみる恐るべき戦闘集団となっていくた。ここでギンプタス*¹がクルガン*²について述べた仮説を認めるなら、まさしく黒海・カスピ海地域から、

ウマと戦車をもった戦闘的な印欧語族がヨーロッパに侵入し、以前そこにいた諸民族の女神たちの代わりに、好戦的な天空の神々と太陽を崇拝する宗教を広めていったことになる。

(『肉食タブーの世界史』、山内^{ひさし}昶、香ノ木隆臣、山内彰、西川隆訳、叢書・ユニベルシタス、法政大学出版局、2001、p.242)

* 1) : マリア・ギンブタスは、リトアニア出身の在アメリカ女性考古学者。Cf.『古ヨーロッパの神々』 鶴岡真弓訳、言叢社、1989。

* 2) : クルガンは、石や土で墳丘を盛り上げたスキタイ人等の騎馬民族の高塚状の墳墓で、馬の殉葬は中世まで存続する。

北欧もスラブもバルト諸民族も、そしてもちろんドイツがふくまれるゲルマン民族は、そのほとんどが、印欧諸語の系譜に属する、馬を崇拝する騎馬民族であった。

バルト語派の諸民族もやはり、ほかの印欧語族と同じように、超自然的な力をもつと信じられていたウマに対して、相当に高い敬意を抱いていたといえるだろう。リトアニアやラトビアの神話に見受けられる歌のなかでは、天体、とりわけ太陽とウマが結びついており、その身分は神の子とされている。昔は季節ごとの儀礼のなかで、絶えることのない豊作と幸福を手に入れようとして、ウマが生け贄として使用されていたが、この動物が特に崇敬されたのは春の時期のことであり、伝統的なリトアニアで見られるように、聖ゲオルギウスの祝日(四月二十三日)には、ウマに入浴させて装飾具をつけたのである。豊穡をもたらすウマの力はまた、民話、民謡、民芸のなかで愛と喜びの象徴(とりわけ白馬)として象徴されることになった。さらに柱、柵、あるいはほかの場所に、ウマの頭蓋骨を載せるといったこともあったが、その目的は、多産、豊かな収穫、人々や家畜の健康を保証してもらうことや、ウマは魔除けにもなるというので、邪眼、病気、そのほかの災厄を祓うことにあったわけである。リトアニアでは、こうしたウマの頭部の彫刻が、さまざまな場所、とりわけ新婚夫婦のベッドの支柱や屋根の天辺にも見られるが、この種の彫刻は、十九世紀のプロテスタントの共同墓地にある墓石の天辺にさえ取り付けられている。

初期のゲルマン民族のあいだでよく話題にされていたのは、ウマと主神オーディンとの結びつきだった。この神にはウマあるいは白馬が生け贄として使用され、その肉は料理して食された。オーディンと関係があったかどうかは記されていないが、タキトゥス(西暦二〇〇―二七六年頃)は、ゲルマン民族がウマを儀礼に使うときの方法が、ペルシア人の場合と非常によく似ていると述べていたし、さらに彼の記述によると、神の意思を知る白馬は「……聖なる森や木立のなかで、公費を使って」飼育されていたらしい。(『肉食タブーの世界史』、pp.263-264)

しかしながら、馬頭等の動物の生首や頭蓋骨に呪力を認めるそうした思考は、もしかするとはるか昔のネアンデルタール人の儀式にまで遡るものかもしれない。アルプスのドラッヘンロツホ洞窟からは、イヨマンテの儀式と同じく、口の中に大腿骨が差し込まれた熊の頭蓋骨が見つかっている。クロマニヨン人たちのモンテスパン洞窟にも、首なしの熊の像、その手前には小熊の頭蓋骨が発見されている。いずれのケースも、切断された頭部にある種の呪力を感じとっていたらしいことは明らかと思われる（中沢新一『カイエ・ソバージュII 熊から王へ』講談社選書メチエ、講談社、2002、pp.56-60）。

そのような見解にももちろん留保はある。それは、生首の崇拜と食人との間に予想される関係からなされる。熊を崇めるイヨマンテの儀式を行うアイヌの人々は、熊の肉を食していた。馬や馬頭を崇めるゲルマン人やスラブ人たちも馬肉を食していた。米を食する古代日本人は、当時は赤くないしは黒い米を供儀として神に供えていた。インドの牛のような反例もちろんあるが、一般的に崇められるものは食されている。忌避されるものは食されない。あるいは食しえないがゆえに忌避される。そのシンプルで、しかし実際には複雑な相関関係は、食文化伝統を、人々がそれぞれの厳しい生態環境の中で生き延びるために行ったコスト計算から唯物的に解析する、生態人類学者マーヴィン・ハリスの衝撃的な説、すなわち膨大な頭蓋骨の残るアステカ文明は祭司による人肉分配システムをとっていた、という説を想起させずにはおかない（『ヒトはなぜヒトを食べたか』ハヤカワ文庫、1997、「9 食人の王国」pp.167-176。生態人類学については、驚異の書『食と文化の謎』板橋作美訳、同時代ライブラリー、岩波書店、1994を参照。また食人については、後者第九章「人肉食の原価計算」pp.265-314参照）。ハリスは、つまりアステカ帝国は、家畜のいない環境の中で不足しがちな動物性蛋白の摂取や人口抑制の必要というコスト・ベネフィット（コスト計算）から、人の供儀を制度化していたと推論している。この生態人類学の突きつける厳しいリアリズムを前にする時、首狩りに関して説得力をもっていたかにみえる共感呪力（フレイザー）さえ相対化され、いささか顔色を失わずにはいない。なぜならば、たとえ後代には呪術的側面が遺され強化されていったとしても、それをさらに遡る時、人頭崇拜や共感呪力さえ、もしかすると、人肉配分という事実を美的なものへとすり替え、韜晦する観念操作の結果としてこそ形成かつ維持・継承されたのではないか、という憶測の可能性もまた排除できないからである。疚しさなく持続的に摂食するためには、食される同類を感謝をこめて崇める特別の儀式が必要であったかもしれないからである。

W. アレンズ著『人喰いの神話—人類学とカニバリズム—』（折島正司訳、岩波書店、1982、pp.8-51、pp.244-246、原著は1978）等をはじめとして、近年は、人喰いの現場を実見した者は皆無であり、実際には存在しないカニバリズム（人食い）は、畢竟植民地支配をめざす西洋人によって捏造された虚構の言説にすぎないとして、西洋近代のコロニアリズムに対する批判的立場等から、食人すなわちカニバリズムの存在は否定される傾向にある（本橋哲也『ポストコロニアリズム』岩波新書、2005、第二章）。しかしながら、マーヴィン・ハリス等の生態学的唯

物的視点を導入するならば、西洋が捏造したと断じようとする、ポスト・コロニアリズムに偏向したそのような言説分析やカニバリズム否定願望をそのままに信ずることの方が、むしろひどく危うい。食人現場に遭遇した事実のないことを根拠にして、大飢饉や船や飛行機等での遭難といった非常事態以外における食人風習の存在を頑として否定しようと願うそうした論法は、次なる告白を読めば、瞬時にして空転することになる。

部族が箝口令を伝えるのを忘れた、グアヤキ・インディオ族の一人の老人と交じあわせた会話（「マノムバ、あ！　だが奴らはみんな死に絶えてしまう！　—— え、どうして？　—— 奴らは、屍を食べなくなってしまったのだから」）から、インディオが三世の間隠し続けていたこと、カニバリズムの事実を知ったのである。（ジャック・アタリ『カニバリズムの秩序—— 生とは何か、死とは何か』（金塚貞文訳、みすず書房、1984、p.19）

この告白を引用したフランスの思想家ジャック・アタリは、食人の存在を肯定するだけではない。人類は、そもそもの最初から筋金入りの食人存在でこそあり、食人が有する治療機能すなわち死を遠ざける機能は、その後の西洋世界においても段階を追って踏襲され、現代は、さらに人工身体による組み替えという形で新たなカニバリズム・レベル（コード・シーニュ）にシフトしつつある、として、大胆なカニバリズム史観を展開している（同、pp.1-10、pp.11-40）。アメリカの文化人類学者ジャレッド・ダイヤモンドも、動物性蛋白不足を補うべく「ニューギニア高地の社会では、伝統的に人肉を食べる風習が広い地域で見られた」（ジャレッド・ダイヤモンド『銃・病原菌・鉄 上』倉骨彰訳、草思社、2000、p.221）として、生態環境によっては食人システムが生きるために不可避であった事実を冷静に指摘している（Cf. 山下晋司、船曳健夫『文化人類学キーワード』有斐閣双書 Keyword Series35、有斐閣、2002、pp.72-73「カニバリズム」、船曳健夫記）。

わたしが過去四十年にわたって仕事をともにしてきたニューギニア人たちは、自分たちの人肉食の習慣を平然と語り、われわれの西洋式の埋葬習慣では親族を食べないこと、つまり、“死者に敬意を表さずに葬ってしまう”ことを知ると、露骨に嫌悪感を示した。また、わたしの下でとても熱心に働いてくれたあるニューギニア人は、一九六五年、死んだばかりの有望な義理の息子を“摂取”する式に参加するために、わたしのところの仕事を辞めた。考古学的に見ても、これまで発見された古代人類の骨のなかには、状況からして人肉食を示唆するものが数多く見受けられる。（ジャレッド・ダイヤモンド『文明崩壊 滅亡と存続の命運を分けるもの 上』楡井浩一訳、草思社、2005、p.240）

アメリカ大陸やニューギニアだけではなく、日本の縄文時代にも「首狩りだけでなく、食人

の風習もあった可能性が強い。このことは、1877年に大森貝塚を発掘して、縄文土器のそもそもの名付け親となったモースによって、すでに指摘されていた。」(吉田敦彦『神話の考古学』福武書店、1984、p.66) 縄文人のみならず弥生人たちもまた、食人を組織的に行っていた痕跡を、鈴木尚『骨が語る日本史』第3章「洞窟が語る弥生時代の犠牲者の謎」(学生社、1998、pp.61-103)は、神奈川県の大浦山洞窟に埋葬されていた人骨の分析から、みごとに浮き彫りにしてみせた。しかも、面白いことに後代弥生中期になると、埋葬される部位が当初の全身から頭部へと偏頗していく傾向をみせる。

それは大雑把にみて頭部を一〇〇とすれば、上肢と下肢はその半数以下であり、胴部と骨盤にいたってはさらに少ない傾向がみられる。

この事実は、まず対象となる人物を洞窟の外で処理したのち、行事に供するため、遺体の一部を洞窟に運んだのではないか。しかも行事に当って、毎回、必ず洞内に持ちこんだものは頭部であつたらしい。(鈴木、p.100)

つまり、食人儀礼が「次第に儀礼化し、簡略化された結果、頭蓋だけになったのではないだろうか。」(鈴木、p.102)と鈴木は推論している。儀礼化の進行や形式化に伴い、頭部崇拜儀礼が確立されていくプロセスを垣間見せるかのようでさえある。このような食人の具体的データや証言をまのあたりにしてくると、ドイツのジャーナリストであるクリスチアン・シュピールが『食人の世界史』(関楠生訳、講談社、1974)において網羅してみせた、世界に遍在する食人に関わるデータ一覧は、その蛮習を早期に克服した西洋に優位をおくといった西洋伝来の弊はあるものの、人類の過去と未来の開示という二重の意味で看過しえないリアリティを帯びてくるように思われる。未曾有の食糧危機に見舞われる可能性の極めて高い近未来、人類がもしかすると、アステカ帝国のように、合理的に選択することを余儀なくされるかもしれない凄惨なシステムが、太古や古代に繰り広げられていたとおぼしきそうした生々しい光景から、不気味に照射、予告されてくるようにも思えるからである。

そのような不気味な光景はもちろん目下ただの臆測にすぎないが、アタリが西洋文化の基底にカニバリズム衝動の段階的展開を透視したのに劣らず、ヨーロッパ文化の幽暗なる基底には、屈折した形で、ないしは完全に隠蔽された形で、太古の頭部崇拜や古代の馬頭信仰等の欲動、すなわち斬首への強い欲動が、現代の今にいたるまで消えることなくしっかりと息づき、うごめき、とぐろを巻いている事実疑問の余地はない、といわざるをえない。民話やグリム童話において一見象徴的に語られる断頭コードは、つまり、たんなる空想であつたのではなく、西洋の思惟や、さらには人類の太古の性向のうちに秘かにとぐろを巻いて雌伏する、神話的^{もとい}基と実質とをその内に生々しく抱懐していたのである。

最後に、斬首的思惟の現代日本における残照例をひとつ挙げてみよう。厳しい生存の現実や知恵を語る民話のひとつ（シンデレラ系列すなわち「灰かぶり」）を基にして創られたシェイクスピアの戯曲『リア王』を、さらに日本の戦国時代に移しかえて翻案した時代劇映画『乱』において、映画監督黒沢明は、風呂敷中の（男の生首や）狐の頭部をはじめとして、生首への強いこだわりを見せている。宮崎美子演じる末の方と原田美枝子演じる復讐する女楓の方という、善悪対なす二人の女性の首が、この映画ではシンメトリーをなすように設定され、ともに刎ねられる。楓の方は血しぶきを上げて一刀のもとに刎ねられ、末の方は、その斬首後の首なし死体として、ただひたすら草むらにうつぶせに横たわるだけの姿で示される。その二つの斬首場面は、斬首という点から見ると、（同一の）女性に対する首斬りが執行された瞬間と、その斬首がなされた直後とが継起的に示される連続画面として配置されていると考えることができる。特に草むらに横たわる一カットの撮影ただそれだけのために、黒沢は約一週間をかけたという。ほとんど瞬間に近いその静止的画像に何かが賭けられているのである。

このように斬首が異常なまでに重視されているのは、西洋図像学の大家エミール・マールが、聖ヨハネの斬首時の姿勢と開いた戸口との必然的な組み合わせについて指摘しているように（『キリストの聖なる伴侶たち』p.47）、斬首が未来への扉を開く奇跡の力を神話的に内包しているからである。今という絶望と化した閉塞状態（闇）から光ある異界への旅立ちの瞬間が、現在の清算を意味する斬首の拝受に託されている。ワイルドの戯曲（1893）やR・シュトラウスたちの歌劇『サロメ』（1905）にあっても、実はヨハネの斬首、大皿の上のヨハネの生首は、旧弊による閉塞状況の勇気ある打破と清算、未来の胚珠そのものとして激しく希求され、またそのように布置されている。それゆえ、黒沢明の『乱』においても、首がないこと、彼方へと去る姿勢として後ろ向きであることが、その図像におけるポイントとなる。

男性があるべき理想の父的存在へと昇り、かつ元の黙阿弥へと惨めにも転落する影的存在の盛衰を、バロック的に描いた映画『影武者』（1980）では、その父的存在を支えもし、また破壊させもする暴れ馬的で動的な魔神的カオスは、「黒雲」という信玄の暴れ馬としてまずは表出された後、最後に不能化される。その他ならぬ馬たちが信長の鉄砲隊の前に無力化し死んでいく様が、高速度撮影によって執拗に描かれ、前景化される。馬たちの断末魔の苦しみに焦点をしばり、そこに何か大事な秘密が隠されていることが、つまり世界が不能化したことが観客に対してあからさまに突きつけられるのである。

その次作となる『乱』（1985）では、前作『影武者』において暴れ馬として描き出されていた魔神的な力は、今度は男たちを翻弄する悪女楓の方として現れ、世界そのものを破壊へと追い込んでいく。だが、破壊は、ここでは必ずしも否定的なだけの事態ではない。馬たちの死に象徴されていた不能化したバロックの影絵の世界において、それに連動してただもう不能と化するだけの無力な男たち（『影武者』）に替わって、今や女たちが、閉塞した世界の彼方へと男たちを駆り立て、越境へと先導するからである（『乱』）。その越境は、第一には斬首されうること

として現れる。洗礼者ヨハネの斬られた首にすがりつき、それが開示した未来の光に恍惚としたサロメ（ワイルド等）のように、斬首は、ここにあっても、閉塞した闇世界の結界を大胆に破壊する未来への血まみれの一打となる。「聖ヨハネは半ば開かれた戸の背後でひざまずき」「自分に永遠の生命をあたえてくれる首切り人に、みずから進んで身をゆだねると見える。」（エミール・マール、p.47）斬首のみが恵与する異界への“死の跳躍”を、善悪二人の対なす女たちが、ともに手を携え敢行していくのである。

もちろん、その跳躍の実相は、光ある未来の地とはあまりにも隔絶した深い亀裂への直面であり、『乱』の最後に超ロングで印象的に示される、絶壁の前にたじろぎ恐怖に後じさる女性の姿に露わにされることになる。だが、それでも、その絶望の眺望化は決定的な一步を踏み出したという重い意味を帯び、その後の黒沢明の諸作中の女性たちによる希望への歩みへとつながっていく。第二次世界大戦の敗戦に続く戦後の混乱時に、光と希望への歩みを女性たちがまず力強く導き、希望をなくして不能化した男たちを引きずり、未来の光満ちる〈幻想世界〉への希望を、すなわち影武者が自らが影であることを忘れて、模倣対象と一体化したと考えるパロディ的な影武者〈幻影状態〉への新たな希望を垣間見せていく様子を、繰り返し描き出していたように（『わが青春に悔なし』『素晴らしき日曜日』『生きる』）、21世紀を目前にしたより深い闇においても、黒沢明を今また光ある未来へと導くもの、それもまたやはり、生命と行動力に満ち、何よりも斬首さるる力に溢れていた強い女性たちであったのである。

注

- 1 本論考は、グリム童話に関する研究同人誌『グリム研究』No.9（日本グリム協会、東京、2001）掲載の「第1章 KHM21「灰かぶり」」（pp.1-20）の続編として『グリム研究』No.10に寄稿を依頼された連載論文「反復で読み解くグリム童話入門」の第二回、すなわちその第2章にあたるものである。2002年3月に脱稿し刊行予定の同誌No.10に提出されたものの、財政上の理由から同誌は休刊となり、提出された原稿もそのまま未発表となっていた。本論は、その原稿に補足を加え、大幅に書き換えたものである。この論文の新奇性は依然変わらぬものと判断し、ここに掲載する。
『グリム童話集』（KHMと略記される）の分類番号は最終第七版に基づき KHM 何番と示される。グリム童話の引用は金田鬼一、野村 滋 両氏のものを適宜用いているが、レクラム文庫の最終決定版 Brüder Grimm, Kinder- und Hausmärchen, hrsg. v. H. Rölleke, Universal-Bibliothek, Reclam 1991 を基本とし、本論文中特に言及はしていないが、エーレンベルク草稿、初版から最後の第七版にいたるすべての版の比較を考察作業の前提としている。
- 2 首狩り研究に関して参考にしたのは、
Robert Heine-Geldern, Kopfjagd und Menschenopfer in Assam und Birma und ihre Ausstrahlungen nach Vorderindien. Im Selbstverlage der Anthropologischen Gesellschaft, 1917.
J. H. Hutton, *The significance of head-hunting in Assam*, The Journal of the Royal Anthropological Institute of Great Britain and Ireland, Vol.58, Jul.-Dec., 1928, pp.399-408.
Adolf E. Jensen, *Myth and cult among the primitive peoples*, The University of Chicago press, 1963, pp.162-206.
ハイネ・ゲルデルン『東南アジアの民族と文化』小堀甚二訳、聖紀書房、昭和17、p.67、135、147、167。
大林太良『神話の系譜：日本神話の源流をさぐる』講談社学術文庫、1991、pp.272-274、1975初出。
- 3 例えば、ジョン・シャーキー『イメージの博物誌18 ミステリアス・ケルト：薄明のヨーロッパ』鶴岡真弓訳、

- 平凡社、1992、p.39、49、pp.52-53、p.55、58、70、85、86、87に人頭崇拝例が写真で掲載されている。クリスチアーン・エリュエール『ケルト人：蘇るヨーロッパ「幻の民」』『知の再発見』双書35、田辺希久子、湯川史子、松田迪子訳、創元社、1994、p.83、pp.90-91、pp.112-114、p.121等。
- 4 高橋吉文「ウィーン：死神、ウィーンに來たる」、筑和正格編『モダン都市と文学』第6章、洋泉社、1994、pp.133-154。高橋吉文「中空の奇跡」、高橋吉文編『ウィーン世紀末』序章、言語文化部研究報告叢書1、北海道大学、1994、pp.1-7。
 - 5 トゥーランドット伝承については、最上英明「トゥーランドット物語の変遷」、『香川大学経済論叢』70号、1998、同「トゥーランドット物語の起源」、『香川大学経済論叢』71号、1997等参照。
 - 6 Brüder Grimm, Kinder- und Hausmärchen, Band 3, hrsg. v. Heinz Rölleke, Reclam Universal-Bibliothek, 1980, S. 170.
 - 7 Johannes Bolte & Georg Polívka, Anmerkungen zu den Kinder- und Hausmärchen, Zweiter Band, Olms, 1982, S. 273-284.
 - 8 Kinder und Haumärchen gesammelt durch die Brüder Grimm, Dritter Band, Dritte Auflage, Göttingen, Verlag der Dieterich'schen Buchhandlung, 1856, S. 156-157. In: Brüder Grimm, Kinder- und Hausmärchen, Band 3, hrsg. v. Heinz Rölleke, S. 168-169.

(原稿受理2008年11月14日、最終採択2009年3月27日)

《SUMMARY》

Einführung in eine an Wiederholungen orientierte neue Lesart der Grimmschen Märchen

Kapitel 2 Europäer als Kopfhäger

Yoshifumi TAKAHASHI

Die Grimmschen Märchen sind aufgrund der Wiederholungen halbsemiotisch zu analysieren. Im 1. Kapitel dieser Einführungsserie habe ich die symmetrische und halbsemiotische Erzählstruktur der Grimmschen Märchen, welche die Brüder Grimm in der tieferen Erzählschicht bewusst und insgeheim gestalteten, an dem KHM21 “Aschenputtel” auf die werkimmanente Weise klargemacht, indem ich mich an der Wiederholung eines “Fuß-Abschneidung”-Kodes orientierte. Im vorliegenden 2. Kapitel handelt es sich als Verstärkung der Analyse anhand vom “Abschneidung”-Kode um eine skizzierende Auflistung und Zitate aus den volkskundlichen Materialien, die den Kult des Kopfes und des Köpfens seit Alteuropa bezeugen, und ferner um die Feststellung der Europäer als Kopfhäger, an deren verborgenen Tradition sie immer noch unbewußt, aber stark festhalten.

Solch eine Neigung findet sich auch in europäischen Überlieferungen wie Volksmärchen. Die Grimmschen Märchen machen dort keine Ausnahme. Bei KHM47 “Van den Machandelboom” lässt sich der “Haupt-Abhauen”-Kode, in verschiedenen Brechungen transformiert, vielfach und symmetrisch wiederfinden. Dasselbe trifft für KHM89 “Die Gänsemagd” zu, wobei man nicht nur den den Lesern sichtbaren Wiederholungen des abgehauenen Pferdekopfes, sondern auch den uns scheinbar unsichtbaren eines rollenden Huts (=Kopfes) wie der kriechenden Haltung (beim Köpfen) der Königstochter begegnet, die sich zunächst am Wasser zweimal, dann am Ende im Eisenofen bäuchlings legt.

Hier im 2. Kapitel werden auch Belege in Bezug auf germanische Kulte und Sitten des abgehauenen Pferdekopfes zitiert. Die Auflistung, die die Notwendigkeit des “Kopf•Haupt-Abhauen”-Kodes historisch begründet, soll die halbsemiotische Analyse des Grimmschen Märchens KHM89 “Die Gänsemagd”, die ich im 3. Kapitel auszuführen vorhabe, vorbereiten und für die Gültigkeit der Methode garantieren.

An Introduction to a New Reading of Grimms’ Household Stories by Repetitions

Chapter 2 European as Headhunter